

北インド・ムスリム社会のザート=ビラーダリー・システム

— ムスリム諸集団の序列化と差異化に関する一考察 —

小 牧 幸 代

はじめに

1. 調査地概況
2. ザート=ビラーダリー構成
3. 序列と差異をめぐる言説と社会慣行
4. ザートおよびビラーダリーの名称の由来
5. 序列の論理, そして差異化へ

おわりに

はじめに

本稿は、北インド・ムスリム社会の社会構造が、どのような構成原理によって成り立っているかを明らかにするものである。これまでインド社会の社会的・人類学的研究において強調されてきたことは、宗教の違いによる相違よりもむしろ、それを超えた類似性であった。例えば、I. Ahmad (1978 [1973] a), Dumont (1988 [1970]), Gaborieau (1972) は「土着化 (indigenization)」という言葉を用いて、インド・ムスリム社会はヒンドゥー社会とよく似た社会であると論じている。確かに、インド・ムスリム社会は、ヒンドゥー社会と類似の特徴を幾つも備えている。この社会では、諸個人の位置づけは「コウム (*qaum*: 語源はアラビア語にあり「民族」を意味)」、「ザート (*zāt*: 語源はアラビア語にあり「種族」を意味)」、「ビラーダリー (*birādarī*: 語源はペルシャ語にあり「同胞, 兄弟」を意味)」などと呼ばれる社会単位によってなされる。そうした社会単位は、ヒンドゥー社会のカースト (ジャーティ) と同様、内婚的で、職業または父系リネージと結びついた固有の名前をもっており、相互に、少なくとも緩やかに、上下に関係を有し合っている。それゆえDumontは、この階層的なムスリム社会を「雑種型のムスリム社会」、「ヒンドゥーのシステムの一つのレプリカ」と評したのである (Dumont 1988[1970]: 206-207, 211)。

インド・ムスリム社会がヒンドゥー社会と類似の特徴をもつことは、Dumontのみならず、多くの論者が認めるところである。だが、最も重要な類似点である階層性を、どのように理解

し、分析するかについては意見が分かれたままである。すなわち、インド・ムスリム社会の階層構造の基底にあるのは、ヒンドゥー社会の構成原理であるカーストなのか否かという問題である。そして、それはさらに、ムスリム社会を分析する際にもカーストという用語が適用できるかどうかという問題にまで発展する⁽¹⁾。

インド・ムスリム社会における階層性の存在は、多くの研究者が指摘しているように、ヒンドゥー的な環境において発達したものであるかもしれない。あるいは、しばしば論じられるように、ヒンドゥー教からの改宗者がムスリム社会にもちこみ「生き残らせた」ものであるかもしれない。ところが、階層性は、ムスリムがヒンドゥーとの差異化を目指す過程で、イスラーム的な語法によって再規定されるようになった。上述のコウム、ザート、ピラーダリーという言葉は、ムスリム社会におけるヒンドゥー社会のジャーティ的性質を帯びた社会集団を指す際に現地社会で使用されるものであるが、それはまさにムスリムの側からなされたヒンドゥーとの差異化の試みのうちのひとつである。ムスリムが、ヒンドゥーが用いるジャーティという言葉は退け、「よりイスラーム的」な言語で自集団を表現しようとするものだからである。

このようなインド・ムスリム社会の研究を進めるにあたって、本稿では、従来のインド・ムスリム社会研究者（例えばCrooke 1896, Ansari 1960, I. Ahmad(ed.) 1978[1973]）が用いていた「ムスリム・カースト（・システム）」という言葉を採用しない。それは、次の理由による。第1に、ヒンドゥー・カースト・システム論自体を見直そうとする研究が増加していること（Fuller (ed.) 1996, Quigley 1994）。例えば、Quigley (1994) は既存のカースト・システムに関する諸グラント・セオリーの有効性を次々に批判する。特に、学問分野だけでなく社会的にも絶大な影響力をもっていたDumontの浄-不浄一元論に対しては、インド各地の現地調査報告との矛盾が指摘され、異議申し立ての声が後を絶たない。ヒンドゥー社会研究においてさえ、カーストとは何かという問題が生じているのである。こうした研究状況に鑑み、インド・ムスリム社会の分析にカーストという概念を用いることは困難であるように思われる。

第2に、インド・ムスリム社会を、独自の視点から分析しようとする研究が登場していること。例えばVatukは「ムスリム独自の用語で、ムスリム社会成層の様式を分析する必要がある。そうでなければムスリムに独特の特質を見逃すことになる」と論じる（Vatuk 1996: 229）。彼女の基本的な立場は、ヒンドゥー・カーストの概念をムスリム社会研究に適用すべきでないとするものである。その理由には賛同しかねる点も幾つかあるけれども⁽²⁾、上記のような彼女の主張は支持すべきである。

カーストという言葉を使用しない第3の理由は、調査地で「よりムスリムらしい」言葉を発見することができたからである。それが、冒頭にも記したザートであり、ピラーダリーである。この民俗語彙は、北インド・ムスリム社会の社会構造を理解するうえで非常に重要である。なぜならそれは、単にムスリムによるヒンドゥーとの差異化を可能にするにとどまらず、ムスリ

ムそのものを上下に区分するものでもありうるからである。

以上をふまえて本稿では、ザートとピラーダリーという語を組み合わせた「ザート＝ピラーダリー（・システム）」という言葉によって、北インド・ムスリム社会の階層構造を表現する⁽³⁾。本稿の目的は、このザート＝ピラーダリー・システムのあり方を記述し、分析することにある⁽⁴⁾。そのため、次のような構成をとる。まず最初に、本稿の事例の中心をなす北インド、ウッタル・プラデーシュ州西部C町の地理的・歴史的・政治経済的背景を簡単に紹介する。次に、C町におけるザート＝ピラーダリー構成について述べたのち、そこで収集・観察されたザート＝ピラーダリーをめぐる言説と社会慣行を例示する。そして、イスラーム的な語法の用いられ方を知る手がかりとして、個々の集団の名称とその由来をみる。最後に、序列を決定する諸要因、あるいは序列の論理を探ることによって、ザート＝ピラーダリー・システムの特徴を浮き彫りにする。同時に、上下に序列づけられたザートとピラーダリーが、近年の傾向として、水平に差異化されつつあることも指摘する。

1. 調査地概況

C町は、北インド、ウッタル・プラデーシュ州西部に位置する小都市である。首都ニューデリーからは、全行程にわたってほぼ完全に舗装された道路が、英国植民地時代に敷設された広軌鉄道によって、容易にアクセスすることができる。1991年の国勢調査によれば、C町の人口は約5万6千人である⁽⁵⁾。宗教別にみると、人口の過半数はムスリムで占められており、以下順に3～4割程度のヒンドゥー、少数のシーク、数世帯のクリスチャンとなる⁽⁶⁾。大多数の住民の母語はウルドゥー語およびヒンディー語であるが、文字媒体の面で前者は後者に圧倒されがちである⁽⁷⁾。

歴史的には、最も古いところでは大叙事詩『マハーバーラタ』にC町の近郊村落が登場する。しかしながら、C町の起源自体はもっと新しい。名前の由来も、ムガル朝成立以前にこの町に現れたあるムスリム男性に求められる⁽⁸⁾。ムガル朝3代皇帝アクバルの時代(在位：1556-1605年)には、C町は、この地域の主要都市として非常に繁栄したようである。だが、それ以降のムガル朝期の書物には、C町に関する記述はみられない。時代が下って19世紀になると状況は一変する。とりわけ、ムガル朝末期のインドを揺るがした「インド大反乱」(1857年)は、この町をも巻き込んだ。英国側の裁判所に職を得ていたあるインド人ムスリムが、数冊の著書のなかに、当時のC町について断片的だが貴重な情報を残している。

C町の行政機関は自治委員会(municipal board)である。現在(1995-97年調査当時)のC町の自治委員会は、25の選挙区から住民の直接投票によって選出された委員(member of municipality)25名と委員長(chairman of municipality)1名で構成されている。委員のなか

からは、さらに副委員長(vice-chairman) 2名が互選される。C町の住民は、これらを名誉ある役職として理解している。そのため自治委員会選挙の結果には、町の有力者たちの名誉と威信がかかっている。この自治委員会を舞台に展開されるミクロなレベルでの政治行動は、後述するように、住民のあいだの政治戦略のあり方や社会関係の動態を知るうえで非常に重要である⁽⁹⁾。

経済領域では、砂糖黍に関連した諸産業に注目すべきである。秋作の砂糖黍は、その他の秋作の米、トウモロコシ、そして春作の小麦、豆類、辛子菜などと並んで、C町の主要な農産物のひとつである。しかし、砂糖黍は栽培されて収穫されるだけではない。交通の便がよいなどの理由から、C町は1970年代以降、砂糖黍の一大集散地となり、近郊村落で収穫された砂糖黍もC町に集荷するようになった。そして、C町の近郊村落に設置された大規模な官営工場と、C町の住民が経営する郊外の中小規模の工場が両輪となって、砂糖黍の収穫のはじまる秋口から春先までの約6ヶ月間、24時間体制で大量の砂糖が製造される。こうした製糖工場で使用される機械や部品を、製作したり、販売したり、修理したりすることで生計を立てる住民も少なくない。このように、農業、工業、商業といった1次、2次、3次産業のいずれにおいても砂糖黍が絡んでいることが、今日のC町の産業の大きな特徴なのである。

C町は、1947年のインド・パキスタン分離独立による住民の移動、1950年代の農地改革（大土地所有制廃止）、そして1970年代以降は砂糖黍の集散地として飛躍的に発展したことなどにより、様々な社会変化を経験した。これらの出来事はC町の社会構造や産業構造、そして住民のあいだの社会関係に多大な影響を与えた。次章ではC町のムスリム社会におけるザート＝ピラダグリー構成を概観するが、その際に、こうした変化に対するムスリム住民の声も紹介していきたい。なお、この面接調査の回答者は全て男性であったため、全般的に女性に関する情報が極めて少ない。

2. ザート＝ピラダグリー構成

C町は、面積と人口密度の両面において、決して一様ではない14の居住区からなっている。そこではムスリム、ヒンドゥー、シク、クリスチャンが、宗教別または集団別に住み分けをして暮らす傾向にある。ムスリムのあいだでは22集団が数えられる。それらは、各々が名前をもつ内婚的な集団として他と区別され、上下にランクづけられている。そのうち、高位の3集団は「外国起源」だとされており、中東や中央アジアに祖先の出身地があるとみなされる。他方、相対的に低位にランクづけられる残りの19集団はインド起源、すなわちヒンドゥー職能カーストからの改宗者だといわれており、現在でもヒンドゥー職能カーストと同じ名称を有するものがある。以下では、これらを回答者の分類に倣ってA～Dの4部門に分け、ランクの高いほ

うから順に紹介する (別表も参照)。

(1) 「外国起源」のムスリム

【A部門】AからDまでの4部門のなかで最も高位のA部門に分類されるのは、祖先が「外国起源」であることを主張するサイヤド、シェーフ、パターンである。このなかで頂点に立つのはサイヤドであり、それにシェーフが続く。どちらも祖先はアラブまたはイランの出身である。第3番目にランクづけられるパターンの祖先は、アフガニスタンおよびパキスタン北西辺境州の出身だといわれる。これらは、それぞれ複雑な下位区分をもっており (第4章で詳述)、集団としてのまとまりや機能はサイヤド、シェーフ、パターンといった上位レベルでは発現しない。その証拠のひとつとして、ヒンドゥー社会のカースト・パンチャーヤト (合議制) に相当する組織が、サイヤド、シェーフ、パターンとも、過去・現在にわたって存在しないことがあげられる。Mannが指摘するように、これらは (実体的な) 集団というよりもむしろ、(理念的な) カテゴリーとして理解したほうが適切である (Mann 1992: 47)。

さて、これらのカテゴリーに属する人が、自らのカテゴリーを指す際に用いる言葉はザートである。つまり、C町には3つのザートが存在することになる⁽¹⁰⁾。本稿では、これら3つのザートに属する人々を、便宜上「ザート・ムスリム」とも記すことにする。

[サイヤド(syed)] 61歳のサイヤド男性によれば、C町のサイヤド人口は1,000~1,500人である。サイヤドの「伝統的」職業について尋ねたところ、大土地所有と勤めという答えが返ってきた。回答者自身は大土地所有者であり、自作農であるが、商売も手がけている。彼の一族は大土地所有制廃止法が適用される以前の先代までは、C町で最大の土地所有者であった。また、彼の伯父にあたる人物は英国植民地支配下のC町で町の収入役を務め、自治委員会の委員長の座にも1920年から1946年まで断続的に3度、合計20年間就いていた。実際、回答者の一族は現在なお、C町で最も有力な一族のうちのひとつである。他のサイヤド一族の職業として回答者が列挙したのは、大土地所有および自作農、勤め、各種の商売であったが、これ以外にも貸店舗や教師などを生計手段とするサイヤドがいる。また、先祖代々の土地を切り売りして生活しているサイヤドも観察される。

生活の変化について、回答者は「昔は広大な土地と小作人のゆえに、あくせく努力をする必要はなかった。貸店舗もあったし、魚の養殖池も14も所有していた。今日のC町のサイヤドは、全体的に経済状態がよいとはいえない。インド・パキスタン分離独立の際に、裕福なサイヤドはほとんどパキスタンに移住してしまった。我々の一族は、そのなかではよいほうだといえる」と話した。サイヤドの町政への関与については、前述のように英国植民地時代にこの一族から自治委員会の委員長がでた。分離独立後は、回答者自身が委員に立候補したことがあるが落選

した。1995年秋に行われたウツタル・プラデーシュ州全地区の自治委員会総選挙で、ようやく現職委員がこの一族に登場した⁽¹¹⁾。

なお、C町のムスリムの大多数はスンナ派であるが、12イマーム・シーア派に属するムスリムも200人程度いる。彼らは全てサイヤドである。スンナ派サイヤドとシーア派サイヤドは今世紀初頭までは通婚関係にあったが、現在はその限りでない。

[シェーフ(*shekh*)] 58歳のシェーフ男性によれば、C町のシェーフ人口は約10,000人である。シェーフの「伝統的」職業は、サイヤドと同様、大土地所有であるという。回答者自身は現在、C町の自治委員会に事務官として勤務している。家業は自作農で、先代、先々代も自作農であった。他のシェーフ一族の職業として、彼は、自作農、貸店舗、輸送業、湾岸諸国への出稼ぎ、勤めを挙げたが、それ以外にも医者、教師、各種の商売などがある。生活の変化について、回答者は具体的な例を出すことはなかったが「昔より景気はよいといえる」と語った。しかし、弁護士事務所を受付係として勤務している別のシェーフ男性(54歳)は、はっきりと「景気も経済状態も今より昔のほうがよかった」と回顧した。彼の一族の場合、先代までは広大な土地を所有していたが、1950年代に大土地所有制廃止法が施行されて土地のほとんどを失い、現在残っているのは家屋敷だけであるという。シェーフの町政への関与については、自治委員会の現職委員が2人いるが、以前にも委員および委員長経験者を何度も輩出している⁽¹²⁾。

[パターン(*pathān*)] 52歳のパターン男性によれば、C町のパターン人口は約1,000人である。パターンの「伝統的」職業として回答者が挙げたのは、サイヤドやシェーフと同じく大土地所有と自作農であった。回答者自身は医者であるが、父祖の職業は大土地所有であった。回答者の現在の経済状態は極めて良好で、大きな自宅兼クリニックがそれを物語っている。生活の変化について、彼は、自分がかつて実兄と共に若き指導者としてC町とその近郊村落の住民を助けていたことを述懐し、今は職業に専心するために指導者としての活動をやめたと話した。パターン全体の町政への関与については、自治委員会の現職委員が2人いる。そのうちのひとは回答者の妻である。さらに、回答者の父は17年間自治委員会の委員を務めただけでなく、1952年から70年まで断続的に3度、合計7年間、委員長の座にいた。祖父もまた委員経験者であった。回答者のイトコにあたる人物のなかにも委員経験者がいるという。

(2) インド起源の改宗ムスリム

他の北インド・ムスリム社会の事例のなかには、例えばMann (1992) のようにムスリム職能集団のランキングを明確に提示しているものもある。しかし、C町のムスリム社会では個々の職能集団間の厳密な上下関係よりもむしろ、B・C・D (上・中・下) といった比較のおおざっぱなランク分けがなされている。BからDまでの3部門に分類される集団は、全部で19である。これらはかつてヒンドゥー職能カーストであったといわれており、今日でもヒンドゥー職能カーストと同じ名称をもつものも少なくない。これらの集団の成員が、自らの集団を指す際に用いる言葉はピラーダリーである。そのため、以下では彼らを「ピラーダリー・ムスリム」とも記すことにする。また、これに関連して各ピラーダリーのあいだでは、ヒンドゥー社会のカースト・パンチャーヤトに相当する組織は「ピラーダリー組織 (organization)」と呼ばれており、組織的な活動を活発に展開しているものもある (別表を参照)。なお、幾つかのピラーダリーは、ヒンドゥー職能カーストを彷彿させるピラーダリーの名称を、イスラーム的なものへと変更した。その詳細は第4章にゆずって、この章では従来のピラーダリー名とその「伝統的」職業を記すにとどめる。

【B部門】B部門に分類される次の3つの職能集団は、ピラーダリー・ムスリムのなかで最上位にランクづけられると考えてよい。これらは互いにほぼ同じ位置にあるとみなされており、3集団のあいだでの上下関係は曖昧である。

〔織工：ジュラーハー (*juḷāhā*)〕このピラーダリーに属する83歳の男性によれば、C町には約10,000人の成員がいる⁽¹³⁾。「伝統的」職業は綿布を織ることであり、それゆえジュラーハー (織工) という名前がある。回答者自身は、ボンベイで半世紀ものあいだ焼菓子屋を営んでいた。だが、1993年に生じたヒンドゥー・ムスリム間の暴動 (1992年12月にウッタル・プラデーシュ州、ファイザーバード県、アヨーディヤー市で起きた「パープリー・マスジド (パープルのモスク)」破壊事件⁽¹⁴⁾の余波によるもの) によって、彼は店舗兼自宅を焼失し、命からがら故郷C町に戻ってきた。このような経歴をもつ彼であるが、先代と先々代は共に綿布を織るという「伝統的」職業に従事していた。他の成員の職業には綿布の輸出、店舗での綿布販売、村などへの綿布の行商の他、各種の商売や勤め、日雇い労働などがある。生活の変化については、景気も経済状態も昔より今のほうがよいということであった。町政への関与については、自治委員会の現職委員が1名いる。

〔鍛冶屋：ロハール (*lohār*)、大工：バライー (*barhāi*)、石工：ラージギリー (*rājgirī*)〕⁽¹⁵⁾ このピラーダリーに属する71歳の男性によれば、C町には4,000人の成員がいる。「伝統的」職業

人 文 学 報

C町のザート=ビラーダリー構成 (1995 - 97 調査当時)

	ザート=ビラーダリー	「伝統的」職業	職業の連続性	別称・呼称・新しい名称	合議制	町政参加	推定人口
A	サイヤド	大土地所有	△	ミール・サーハブ (シーア派)	×	○	1,000-1,500
A	シェーフ	大土地所有	△	シェーフザーデー	×	○	10,000
A	パターン	大土地所有	△	ハーン	×	○	1,000
B	ジュラーハー	織工	△	モーミン・アンサーリー	△	△	10,000
B	ロハール、バライー、ラージギリ	鍛冶屋、大工、石工	○	サイフィー	○	×	4,000
B	カサイー	肉屋	○	シェーフ・クレーシー	△	△	3,000
C	ハルワーイー	菓子屋	△		△	○	2,500
C	テーリー	油屋	×		△	○	2,000
C	ドービー	洗濯屋	○		○	×	1,500
C	カラール	造り酒屋	?	シェーフ・スイッディーカー	△	△	1,200
C	パディヤラー	旅館・飲食店	△		○	×	1,200
C	クムハール	土器造り	△	カスガル	△	△	1,000
C	ドゥネー	綿屋	○	マンズリー	△	△	700-900
C	ダルズイー	仕立屋	○	イドリースイー	△	△	750
C	ラングレーズ	染屋	×	サッパキー	△	×	700
C	ナーイー	床屋	○	サルマーニー	○	×	500
C	ゴースイー	牛乳屋	○		○	×	300
C	マニハール	腕輪屋	○		○	×	200
C	サッカー	給水	×	アッパースイー	○	×	125
C	タバルチー	楽隊	○	バージャーワーレー・シェーフ またはシェーフ・タバルチー	○	×	100
C	ミラースイー	吟唱詩人、系図詠み	×	ハーン・サーハブ	○	(△)	40
D	ファキール	物乞い	△	シェーフ・アラヴィー	△	×	4,000

<表の見方>

※1 「職業の連続性」: 「伝統的」職業と現在の職業の連続性が非常に強い○、まだ残っている△、それほどでもない×

※2 「合議制」: 合議制が現在でも機能している○、現在は機能していない△、もともと存在しない×

※3 「町政参加」: 自治委員会の委員長が輩出された○、委員が輩出された△、どちらも輩出されていない×

北インド・ムスリム社会のザート=ピラーダリー・システム (小牧)

は、鉄、木材、石を扱う仕事である。そもそもロハールは鍛冶屋、バライーは大工、ラージギリは石工を意味している。回答者自身は家屋敷の模型をつくる仕事をしていたが、現在は隠居生活を送っている。他の成員については、砂糖黍破碎機や遠心分離機など、製糖工場で使用される機械や部品の製造・販売・修理を専門とする人が非常に多い。また、大工（農具や家具の製作・販売・修理）、湾岸諸国や他都市への出稼ぎ、単純労働によって収入を得ている人がよくみられるだけでなく、製材所経営、医者、警察官、学校経営、農業に携わる人もいる。生活の変化について、経済状態は昔よりも今のほうが非常によいということである。町政への関与について、1995年秋の自治委員会総選挙では、このピラーダリーの成員が委員長に立候補したが落選した。結局、C町ではこのピラーダリーから自治委員会の委員も委員長もまだ輩出されていないのであるが、他の幾つかの市町村では委員長が輩出されたことがあるらしい。

[肉屋：カサーイー(*qasā'i*)] このピラーダリーに属する60歳の男性によれば、C町には3,000人の成員がいる。「伝統的」職業は、パンジャブ州やハリヤーナー州から買い付けた水牛や山羊などの動物を地元で売ること、水牛や山羊などの動物を屠殺すること、またその肉片を売ることである。今日のC町では1日に60~70頭分の水牛の肉が売られているという。肉食文化をもつC町のムスリムにとって彼らの存在は日常的にも重要であるが、1年または一生のあいだに何度かめぐってくる儀礼においても、その存在を欠くことはできない。例えば、イスラームの三大祭のひとつである犠牲祭、ムスリム幼少年の儀礼アキーカ⁽¹⁶⁾、結婚式、そして葬礼(死後40日目の儀礼)の際に、このピラーダリーの成員は、当事者の家に出向いて犠牲獣ないしは宴会で饗される動物を屠殺・解体して肉片にする。回答者自身はパーン(キンマの葉にピンロウジュの実と石灰を包んだ興奮作用をもたらす嗜好品)の店の主人であるだけでなく、自作農でもあるが、父と祖父は「伝統的」職業に従事していたという。他の成員の職業には、「伝統的」職業の他に、マンゴーなどの果樹園の経営、屠殺された動物の皮革や骨を売る仕事などがある⁽¹⁷⁾。さらに、C町他の住民によれば、このピラーダリーには助産婦として働く女性も数人いるらしい。生活の変化については、回答者自身の現在の経済状態は「まずまず」という返事で、「ピラーダリー全体が昔よりよくなってきている」ということであった。町政への関与に関しては、自治委員会の現職委員が4人おり、以前にも何人かの委員を輩出したことがある。だが、委員長はまだでていない。

【C部門】C部門に分類される職能集団は全部で15である。これらのあいだでの上下関係も、B部門と同様、曖昧である。従って、以下に紹介する順序はランキングではなく、回答者による推定人口の多い順に筆者が配列したものである。

[菓子屋：ハルワーイー(*halwāī*)] このピラーダリーに属する68歳の男性によれば、C町には2,500人の成員がいる。「伝統的」職業は、粉砂糖、砂糖菓子、菓子をつくること、そして砂糖黍破砕機の請負業だという。このピラーダリーの仕事は、インド・イスラーム文化に不可欠だといっても過言ではない。あらゆる祝い事に砂糖菓子や菓子はつきものだからである。例えば、断食月には毎晩、各マスジドで聖クルアーンを詠み進めるが、それが終了した夜には参加者のあいだで砂糖菓子が配られる。また、子供が聖クルアーン学習を無事終了した家庭では、砂糖菓子を親族や近所に配る。イスラームの二大祭のうちのひとつである断食月明けの大祭や、婚約式、結婚式、子供の誕生にも菓子は欠かせない。インド・イスラーム圏では断食月明けの大祭が「甘味の大祭」と呼ばれるのはよく知られている。さて、この回答者自身は不動産業を営んでいるが、その父と祖父は「伝統的」職業に従事していた。また、彼の3人の息子のうちの1人も「伝統的」職業に携わっている。しかし、一方で別の息子は「伝統的」職業を嫌い、洋品店をはじめた。他の成員の職業には、石炭を扱う仕事、木賃宿経営、製糖工場経営、粉砂糖工場での日雇い労働などがある。生活の変化については「昔はマドラサ（聖クルアーン学習のための宗教学校）のみで教育は低かったが」と回顧した。町政への関与について、自治委員会の委員は約40年前に1人だが、あとは続いていない。自治委員会の現職委員長は菓子屋ピラーダリーであるが、回答者によれば彼はヨソモノなので、C町の菓子屋ピラーダリーとは関係がないということであった。

[油屋：テーリー(*telī*)] このピラーダリーに属する75歳の男性によれば、C町には2,000人の成員がいる。「伝統的」職業は、菜種などの油を絞ることである。回答者自身は、店舗を構えて食用油やギー（乳脂肪製品）、全粒小麦粉、豆類、粉類などを売っている。回答者の父も「伝統的」職業から距離をおき、小さな店を経営していたというが、祖父は「伝統的」職業に従事していて、菜種油を搾って売っていた。今日では搾油という仕事はほぼ完全に機械化され、工場でのみ行われるようになり、これに従事している成員はいないのだという。従って、他の成員は果物屋、米屋、各種の商売、仕立屋、大工などして生計を立てている。生活の変化があるとすれば、それは「40～50年前はこのピラーダリーの成員には教育を受けた者がいなかったが、最近では教育を受けるようになり、商売においても大変発展した」点であるという。町政への関与については、自治委員会の現職委員が1名おり、数年前にも委員長と委員（同一人物）、さらに時期を異にしてもう1名の委員を輩出した。

[洗濯屋：ドービー(*dhōbī*)] このピラーダリーに属する54歳の男性によれば、C町には1,500人の成員がいる。「伝統的」職業は洗濯である。回答者自身は借店舗で豆類を売っているが、父と祖父は「伝統的」職業に従事していたという。他の成員の職業には、「伝統的」職業の他

に靴屋、湾岸諸国への出稼ぎなどがある。なお、洗濯の仕事に従事しているといってもC町だけでなく、デリー、ボンベイ、シムラーなどの大都市・観光都市のホテルに勤めている人もいる。生活の変化については、「景気は昔と比べてとりたてて変化があるわけではない」。町政への関与は、自治委員会の委員も委員長もまだ輩出していないが、近郊の市町村のどこかで委員が1人はでているはずだという。

〔造り酒屋：カラール(*kalār*)〕このビラーダリーに属する38歳の男性によれば、C町には1,200人の会員がいる。「伝統的」職業について尋ねたところ、「特定の職業はない。労働者として働く人が多い」という回答であったが、C町の他の住民からの情報によれば、このビラーダリーの「伝統的」職業は酒造業である。回答者自身は製材所と煉瓦工場の経営者であり、比較的裕福である。彼の父は請負業者、祖父は自作農であったという。他の会員のなかには農業労働者、日雇い労働者として働く者が多いが、警察官や法律家もいる。町政への関与について、回答者はかつて自治委員会の委員に立候補したものの、同じビラーダリーからの立候補者に敗れた。その委員経験者は、1995年秋の総選挙で委員長に立候補したが落選した。

〔旅館・飲食店：バティヤーラー(*bhathiyārā*)〕このビラーダリーに属する30歳の男性によれば、C町には1,200人の会員がいる。「伝統的」職業は、かまど(タンドゥール)に関係のある仕事、特に水ぎせるとナーンをつくることだという。しかし、文献によればサラエーと呼ばれる旅館と飲食店の経営もまた、このビラーダリーの「伝統的」職業である(Ansari 1960, Goodfriend 1983, Mann 1992)。彼らの仕事もまた、ムスリムの人生儀礼と深く関わっている。例えば、水ぎせるはかつて、この社会でジャヘーズと呼ばれる花嫁持参財の必須アイテムであったという。また、彼らが焼くナーンは、アキーカや結婚式の宴会に欠かせない。回答者自身は仕立屋であるが、彼の父は今でも水ぎせるの製作に従事している。他の会員の職業には、果物の行商、運転手、マッサージ師などがある。生活の変化については、「このビラーダリーには現在でも教育のない、貧しい人が多い」ということであった。町政への関与については、自治委員会の委員に、回答者の父や他の会員が立候補したことがあるが、いずれも落選した。従って、このビラーダリーからは自治委員会の委員も委員長もまだ輩出されてはいない。

〔土器造り：クムハール(*kumhār*)〕このビラーダリーに属する50歳の男性によれば、C町には1,000人の会員がいる。「伝統的」職業は、素焼きの器をつくることである。「我々の祖先は自らの知恵で土器造りをはじめた。ムガルの時代には大変敬意を払われていた」という。この言葉は、彼らのつくる素焼きの器が、日常生活のなかで使用されるだけでなく、儀礼に不可欠のアイテムでもあったことに根拠をおいている。例えば誕生、結婚、葬式といった人生儀礼の

それぞれに必要なとされる特定の種類の土器は、彼らだけがつくることができた。さらに、イスラームの二大祭の折りには、町のマスジドやイードガーと呼ばれる集団礼拝用の広場に水差し（礼拝前に頭部と手足を浄めるのに用いられる）を納めていたという。その他、水ぎせるの煙突部分や、茶屋で用いられる使い捨てのティーカップなどの製作は、現在でも彼らの主要な仕事である。回答者自身はコンクリートを扱う仕事に就いているが、先代、先々代は野原にかまどを掘って煉瓦を焼いていたという。他の成員の職業には、土器や煉瓦を焼く仕事、花婿行列の白馬をひく仕事、2頭立て馬車の御者、警察官、経理としての勤め、石工などがある。町政への関与について、約10年前に自治委員会の副委員長がでたが、その後は委員も委員長もでない。

〔綿屋：ドゥネー(*dhune*)〕このピラーダリーに属する50歳の男性によれば、C町には700～900人の成員がいる。「伝統的」職業は綿をすくことであるが、この仕事にはシーズンがあって、冬季にのみ従事するという。回答者自身も冬になると綿すきをする。また、その父も祖父も同様であったらしい。昔は綿すきは完全な手作業であったが、彼の父の時代からは簡単な仕組みの機械で行われるようになった。他の成員の職業には、「伝統的」職業の他に、果物の行商、農業労働、勤め、小規模な製粉・精米所経営などがある。また、家政婦として働いている女性や少女も多い。生活の変化については「景気は昔よりよくなってきている。ただ、昔はのどかだったが、今はめまぐるしい生活という違いがある」。町政への関与について、自治委員会の現職委員が1名いるが、その人が、このピラーダリーの輩出した初めての委員であるという。他方、委員長はまだでない。回答者自身はある中央政党的の支部代表を務めており、日常的に忙しいため、自治委員会の選挙には立候補しなかったのだという。

〔仕立屋：ダルズィー(*darzi*)〕このピラーダリーに属する50歳の男性によれば、C町には750人の成員がいる。「伝統的」職業は仕立屋であり、回答者自身も仕立屋である。彼の顧客にはムスリムだけでなくヒンドゥーもいるが、ヒンドゥー不可触民の衣服も拒否することなく仕立てる。回答者の祖父は、英国植民地時代のカルカッタで、英国資本の縫製会社に現場監督として勤務していたという。町政への関与は、自治委員会の現職委員が1名おり、以前にも委員を1名輩出している⁽¹⁸⁾。

〔染屋：ラングレーズ(*rangrez*)〕このピラーダリーに属する63歳の男性によれば、C町には700人の成員がいる。「伝統的」職業は、綿布の染色である。回答者自身は仕立屋であり、詩人でもある。彼の父と祖父もまた仕立屋であったが、遠縁の祖父にあたる人物は「伝統的」職業である染色の仕事に就いていた。回答者によれば、このピラーダリーでは40年くらい前に「伝

統的」職業を捨てた。綿布の染色が機械化されたことと、染色という仕事ではよい収入が得られなくなったことがその理由だという。他の成員は、ボンベイ、ドゥバイ、パリなどの出稼ぎ先で仕立ての仕事をするほか、缶詰容器の製造、化粧品店経営、贈答品店経営、機械工、大工、金細工師などをして生計を立てている。生活の変化について、昔よりも今のほうが景気はよいということであった。町政への関与については、自治委員会の委員および委員長はまだ輩出されていない。

[床屋：ナーイー(*nāī*)] このピラーダリーに属する45歳の男性によれば、C町には500人の成員がいる。「伝統的」職業は、床屋以外に、料理、割礼、外傷の手当て、仲人(仲介者・メッセンジャー)などがある。回答者自身は床屋であり、大通りに面した小さな店をもっているが、昔ながらの客からは今でも家に呼ばれて髪や髭の手入れをしている。回答者の父もまた「伝統的」職業に従事していた。他の成員の多くは、仲人を除く上記の「伝統的」職業のいずれかに従事しているが⁽¹⁹⁾、例えば回答者自身は割礼の仕事をしたことがないというように、ピラーダリー内部での職業の専門化ないしは分業がみられる。生活の変化について、「床屋の経営状況には波があるが、それでもどうにかうまくいっている」ということである。町政への関与については、C町の自治委員会には委員長も委員もまだ輩出していないものの、近隣都市では数年前に自治委員会の委員長が誕生したらしい。そして「今後は、このC町からも委員もしくは委員長を輩出したい。教育のある人もでてきたことだし、自分のピラーダリーの福祉のためにも是非でてもらいたい」ということであった。

[牛乳屋：ゴースィー(*ghōsī*)] このピラーダリーに属する55歳の男性によれば、C町には300人の成員がいる。「伝統的」職業は、水牛を使って土地を耕すこと、水牛を飼育すること、水牛の乳を販売することである。回答者自身、水牛の飼育とその乳の販売を生業としている。彼の父と祖父も同様の仕事に従事していた。他の成員についても、大多数が水牛の飼育および水牛乳の販売に従事しているというが、C町の長距離バス発着所で屋台の茶屋を営んでいる成員が1人、そして女子校のすぐ近くで文房具と本を扱う店を営んでいる成員が1人いる。生活の変化については、「昔はのどかでよかった。今は生活が困難だ。物価が高くなってきているから」という回答であった。町政への関与については、自治委員会の委員に回答者自身が2～3回立候補したものの落選が続いている。

[腕輪屋：マニハール(*manihār*)] このピラーダリーに属する65歳の男性によれば、C町には200人の成員がいる。「伝統的」職業は、ガラス製の腕輪をつくることである。回答者自身はガラス製の腕輪を売る仕事をしており、その息子はC町のジャーマ・マスジド近辺にガラス製の

腕輪を扱う店をもっている。回答者の父も祖父も同様にガラス製の腕輪を扱う仕事に携わっていたが、祖父の代までは製作をも手がけていたものの、父の代からは製品を買ってきて売ようになった。他の成員については、子供服の卸売りをしている成員が1人いるが、それ以外は皆、ガラス製の腕輪を売る仕事に従事している。生活の変化について、暮らしぶりは「昔よりよくなったといえる」。町政への関与については、自治委員会の委員長および委員はまだ輩出されていない。

〔給水：サッカー(*saqqā*)〕このピラーダリーに属する51歳の男性によれば、C町には125人の成員がいる。「伝統的」職業は、動物の皮革でできた水袋を背負って飲料水を運ぶことである。回答者自身は、自治委員会の事務をしている。父祖は、「少なくとも7世代前まで遡っても、皆この水を運ぶ仕事に従事していただろう」ということであった⁽²⁰⁾。他の成員は、床屋、各種の商売、湾岸諸国への出稼ぎ、勤め、日雇い労働などに従事している。また、結婚式場となった民家や空き地に給水タンクで水を運ぶ仕事をしている人もいる。C町の他の住民からの情報によれば、かつて女子校で雑役婦として働いていたという老女も、このピラーダリーの成員である。生活の変化については、「昔よりも景気はよくなってきている」。町政への関与については、C町では自治委員会の委員長も委員もまだ輩出していない。しかし、他の市町村では自治委員会の委員がでたらしい。

〔楽隊：タバールチー(*tabālchī*)〕このピラーダリーに属する65歳の男性によれば、C町には100人の成員がいる。「伝統的」職業は、楽隊を編成して楽器を演奏することである。それには、例えば花婿行列、結婚披露宴、新生児の儀礼チュッティー（以上、ムスリム・ヒンドゥーの区別なし）、ムスリム幼少年の儀礼アキーカ、ヒンドゥーの葬送行列⁽²¹⁾といった機会がある。彼らのサービスはムスリムとヒンドゥーの両方に対して提供されるが、ヒンドゥーからの依頼のほうが多いという。回答者自身、この「伝統的」職業に従事しており、その「父も祖父も曾祖父も、そしてずっと昔から、分かる範囲ではムガルの時代から、一族は一貫してこの仕事に携わってきた」という。他の成員も、ほとんどが「伝統的」職業に従事している。C町の他の住民によれば、このピラーダリーには助産婦として働く女性も数人いるらしい。生活の変化については、現在の「景気はとりたててよくも悪くもない。食事はできる」ということであった。町政への関与については、「自治委員会の委員長および委員はまだ輩出されていない。立候補しようとする意志をもっている人さえない。仕事がまず軌道に乗らないことには」という返事であった。

〔吟唱詩人・系図詠み：ミラーシー(*mirāsī*)〕このピラーダリーに属する62歳の男性によ

れば、C町には40人の成員がいるが、それは回答者自身とその妻、7人の息子、3人の娘、そして彼らの子供たちであり、従って全員が回答者の一族である。彼らは、詩の吟唱、系図詠み、門づけといった仕事をムガル朝の時代から「伝統的」職業としてきた。例えば、婚約式、結婚式、アキーカといった機会に家に呼ばれて詩や系図を詠唱するのであるが、依頼者はムスリムとヒンドゥーの両方であったという。回答者自身は、父方叔父から「伝統的」職業を学び、最初はこれに従事していたのだが、40年くらい前にやめた。現在は、C町で床屋をしている。回答者の長男はトラック運転手、次男、三男、四男、五男はいずれも父と同様、床屋であるが、四男以外は出稼ぎにでている。六男は麻の取引、そして末息子は機械工である。生活の変化は、「伝統的」職業を披露する機会が極端に減ったことだという。廃業したわけではないのだが、開店休業状態がずっと続いている。町政への関与については、回答者の娘が自治委員会の現職委員である⁽²²⁾。

【D部門】

[物乞い：ファキール(*faqīr*)] このビラーダリーに属する45歳の男性によれば、C町には4,000人の成員がいる。「伝統的」職業は、物乞いと墓掘りである。回答者自身は廃品回収を生業としており、父は牧夫、祖父は物乞いをして生計を立てていた。他の成員の職業には、仕立屋、石工、牧夫、墓掘り、聖者の墓の番人などがある。さらに、このビラーダリーに属する女性によれば、助産婦として働く女性が数人いる。生活の変化は「景気は昔よりはよくなってきたが、それでも教育のレベルはまだかなり低い。貧乏なので子供を学校に通わせることができない。十分な教育が受けられるのは1,000人か100人に1人くらい」であるという。また、昔は多くの成員が物乞いをして小麦粉、現金、食事などを受け取っていたが、最近はそうではなく、何らかの仕事をもつようになってきたという。町政への関与については、自治委員会の委員長も委員もまだ輩出していない。回答者自身、委員に立候補したが落選した。だが、近郊村落では委員長がでたらしい。なお、物乞いビラーダリーのザート=ビラーダリーの地位はC町のムスリム社会ではこのように最下位であるが、それはこのビラーダリーがムスリム不可触民であることを意味しているわけではない。

以上のザートとビラーダリーに関する情報のなかで、とりわけ次の3点に留意したい。まず最初に「伝統的」職業であるが、ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムは、「伝統的」職業の相違といった観点からみると、大きく大土地所有者と職人というカテゴリーに分けることができる。これまで、サイヤド、シェーフ、ムガル、パターン(ここでいうザート・ムスリム)には「伝統的」職業はないと論じられてきた。しかしながら、少なくともC町の住民は、ザート・ムスリムの多くがかつて大土地所有者であったという事実から、それをザート・ムス

リムの「伝統的」職業とみなしているのである。

次に、ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムのあいだでは、全般的に経済格差が著しかったことが住民の話から明らかである。しかし最近では、それが是正される方向に向かっていくようである。農地改革によって土地を基盤とした経済力を減退させ、しかも新たな活路を見出せずにいるザート（特にサイヤド）は停滞してしまった。逆に、「伝統的」職業を時代のニーズにうまく適合させ、経済的に成功を納めたビラーダリー（特に織工、鍛冶屋・大工・石工、肉屋といったビラーダリー）は躍進してきている。こうした経済面での浮沈は、教育レベルや政治参加の度合いにも反映されている。

最後に、助産婦を職業とするムスリム女性たちのビラーダリーの属性にも注目しておきたい。ムスリムのなかでは物乞い、楽隊、肉屋といったビラーダリーに助産婦がみられる。ここでヒンドゥー社会にも目を向けるならば、不可触カースト（皮なめし職人）に属する女性が助産婦として働いている。今日のC町のムスリム社会における肉屋ビラーダリーの地位は、決して低いものではない。それにもかかわらず、肉屋ビラーダリー女性がヒンドゥー不可触民がするような「不浄」な職業に従事する背景には、もちろん経済的な理由も大きく横たわっていると思われるが、それだけでなく肉屋ビラーダリーのかつての儀礼的地位（ヒンドゥー教からイスラームに改宗する前のそれ。ヒンドゥー社会における肉屋カーストの地位はかなり低い）があとをひき、彼女たちにこの仕事をさせていると考えることもできる。

(3) ヒンドゥー社会のカースト構成

これまで、ムスリム社会のみに焦点をあててきた。ここで、その主要なカウンターパートであるヒンドゥー社会についても簡単にふれておきたい。諸ヒンドゥー・カーストのジャーティ名と「伝統的」職業、および序列はおおよそ次のようになっている。

C町のヒンドゥー社会は、ブラーマンであるバンディト（家庭司祭）を頂点として、不可触民とされる2つのカーストを底辺とするヒエラルキーを呈している。この両極のあいだに位置づけられるのは、パンジャービー（商人）、チョーハーンまたはラージプート（自作農）、パニヤー（商人）、ティヤーギー（自作農）、ジャート（自作農）、グージャール（自作農）、スナール（金細工師）、ヤーダヴ（自作農）、クムハール（土器造り）、バグバーン（野菜栽培）、スィンガーレー（水上野菜栽培）、カンジャール（縄ない）、ディワール（竹細工師）などである。そして、不可触民であるとして社会の最底辺に位置づけられているのは、チャマール（またはハリジャン）と呼ばれる皮なめし職人と、バンギー（またはバルミー、ジャマーダール、メハタル）と称される清掃カーストである。以上のほかに、アチャーラージ（死者の荷物処理）、パリヤー（手相見）、ジョーシー（占星術師）といった職業に従事するヒンドゥーもいるが、それらはブラーマンのサブ・カーストであるという。

こうしたヒンドゥー・カーストのうち、ムスリム社会において特に決定的な役割を演じるものがある。それは、清掃カーストである。彼らの提供するサービス、そして彼らの存在自体が、C町のムスリムにとっていかに重要であるかは次章以下で明らかになる。

3. 序列と差異をめぐる言説と社会慣行

前章ではC町のムスリム社会のザート＝ビラーダリー構成を紹介した。この社会の内部で、序列と差異はどのようなかたちで表現されているだろうか。現地で収集・観察された言説と社会慣行に基づいて記述していきたい。

(1) 民俗語彙における二分法

C町の投票予定者名簿(voters' list)からは、ムスリム有権者のザート＝ビラーダリーの属性を即座にうかがい知ることはできない。その一方で、1995年秋にウッタル・プラデーシュ州全市町村で一斉に行われた自治委員会総選挙では、ムスリムのあいだにも「後進階級」という留保枠が設けられた⁽²³⁾。本稿で「起源」を基準として分類しているザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムという区別が、留保制度という形態をとって、行政のなかにもちこまれたのである。これによって、ザート・ムスリムは「一般」という枠でしか立候補できなくなり、逆にビラーダリー・ムスリムは「一般」はもちろん「後進階級」という枠も確保して、町政参加への機会を大幅に拡大した。ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムの区別は、こうして政治的領域という公的な場面でも人々の意識にのぼるようになったのである。それでは日常生活、すなわち私的な場面において、ザート＝ビラーダリーの属性は、どのように表現されるのであろうか。まず最初に、民俗語彙における二分法に注目してみたい。

①アシュラーフと非アシュラーフ：「外国起源」とされるザート・ムスリムは、ひとまとめにされてアシュラーフ (*ashrāf*) と呼ばれる。アシュラーフとはアラビア語のシャリーフの複数形であり、この地域では「高貴な身分のムスリム」を意味する⁽²⁴⁾。これに対して、インド起源のビラーダリー・ムスリムを「身分の低いムスリム」という意味でアジュラーフ (*ajlāf*) と呼ぶとする研究者もいる⁽²⁵⁾。だが、ビラーダリー・ムスリムを一括してアジュラーフと呼ぶ方法は、C町では浸透していない。アシュラーフという言葉は、対語こそ民俗語彙のなかにもたないとはいえ、非常に重要である。なぜなら、それは第5章第2節で論じるように、ザート＝ビラーダリー・システムにおけるステイタス・モビリティ現象と密接に結びついているからである。

②ジャジマーンとカミーン：ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムを区別する際に、かつて特定のサービスの授受関係を指していた用語を採用する住民もいる。サービスを受

ける者と提供する者、すなわちジャジマーン (*jajmān*) とカミーン (*kamīn*) という二分法である。ジャジマーンは多くの場合、大土地所有者であるザート・ムスリムであった。彼らは日常生活を営むうえで飲料水の調達、整髪、洗濯、トイレや床の掃除⁽²⁶⁾といったサービスを必要としたが、そうしたサービスを提供するのが、カミーンと称される種々のピラーダリー・ムスリムやヒンドゥー不可触民(清掃カースト)だったのである。カミーンは、それぞれのサービスの内容に応じて、作物の収穫期に一定量の玄米、小麦、粗糖などを報酬として受け取った。

カミーンは、日常的にジャジマーンにサービスを提供するだけではなかった。ジャジマーンの家で結婚式や宴会が行われるときには、手伝いにかりだされた。床屋は整髪だけでなく、夫婦で仲人(仲介者・メッセンジャー)としても活動した。ヒンドゥー清掃カースト以外のカミーンの妻たちは、ジャジマーンの台所で皿洗いなどをしたという。こうしたジャジマーンとカミーンの関係は、世襲されることも珍しくなかったらしい。しかし、農地改革、都市化、貨幣経済の浸透がより進んだ今日では、ジャジマーンとカミーンのあいだのいわゆるジャジマーンー関係は、一部の例外(あるサイヤド一族とヒンドゥー清掃カーストのあいだでは現在でもジャジマーンー関係の名残がみられる)⁽²⁷⁾を除いて消滅してしまったようである。

C町のムスリム社会では、かつてカミーンであったというピラーダリーは、他のピラーダリーに比べて低位に位置づけられている。カミーンよりも仕事の内容が自律的で、サービスを提供する機会が毎日とか毎月といったような定期的なものではないけれども、ともかくジャジマーンにサービスを提供していたという職人はラグダール(*lagdār*)⁽²⁸⁾と呼ばれ、カミーンの上に位置づけられる。例えば、鍛冶屋・大工・石工ピラーダリーなどがこれに相当する。そして、カミーンでもラグダールでもなかったというピラーダリー(例えば織工ピラーダリー)は、C町のムスリム住民の意識においては、さらに上位に位置づけられている。

③大土地所有者と職人：ザート・ムスリムとピラーダリー・ムスリムの区別を、大土地所有者(*zamīndār*)と職人(*dastkār*)という二分法を用いて表現する住民もいる。第2章でも紹介したように、かつて大土地所有者の多くはザート・ムスリムであった。ある鍛冶屋・大工・石工ピラーダリーの男性によれば、「大土地所有者は自分で仕事をしない。家の中で、じっと座っているだけだ。家の中の仕事も使用人がする。それに比べて我々は、自分の手を動かして、努力して仕事をする。だから発展するのだ」という。逆に、あるサイヤド女性とシェーフ女性にとって、手仕事(*dastkārī*)で生計を立てるのは、「下層の者(*nīche lōg*)」のする卑しいことである。

④身分の「高い民族」と「低い民族」：身分の「高い民族(*ūnchī qaum*)」と身分の「低い民族(*nīchī qaum*)」という言い方は、日常生活のなかでしばしば耳にすることができる。ザート・ムスリム女性が、ピラーダリー・ムスリム女性の礼儀作法、話し方(声の調子や語彙)、

ブルカと呼ばれる外套の被り方、買い物の仕方などについて言及する際に、この言葉を多用するのである。

⑤「先進階級」と「後進階級」：明らかに留保制度の影響を受けていると思われるのであるが、ザート・ムスリムとピラダリー・ムスリムを「先進階級（forward classes）」と「後進階級（backward classes）」という言葉で言及する住民がいる。「先進階級」という言葉はインドの留保制度には存在しないのであるが、「後進階級」の対語として、C町のムスリムのあいだでは用いられている。

⑥ザート・ムスリム女性とピラダリー・ムスリム女性：C町のムスリム社会では、家政婦を雇う場合に、ザート＝ピラダリーの属性が相対的に低位の人を選ぶ傾向にある。例えば、ある鍛冶屋・大工・石工ピラダリーの家庭では、土器造りピラダリーや楽隊ピラダリーの女性を家政婦として雇っていた。また、サイヤドに関しては、綿屋ピラダリーの女性を雇う家庭が幾つも数えられた。ザート・ムスリムの家庭に雇われたピラダリー・ムスリム女性は、通常、主人の家族と同じ食卓で食事をとることはない。他方で、その家政婦が経済的に困窮したサイヤドとパターンである場合には、食卓を共にする様子が観察された。

しかしながら、家政婦をとりまく環境には異変が生じつつある。あるサイヤド女性によれば、最近ではピラダリー・ムスリム女性が家政婦という仕事を嫌い、市場は売り手上位となってきた。彼女は横柄な態度をとる家政婦をやめさせることができずに困っていたのだが、その理由として、これまで外出に何の規制もなかったピラダリー・ムスリム女性たちが、パルダを遵守して家のなかに閉じこもるようになったことをあげた。彼女の言葉に現れるパルダとは、女性を家族以外の男性の視線から、布や外出規制などの方法で物理的に遮断する慣習である。パルダを理由に自分は外出せず、相手に訪問を求めるのは、かつてザート・ムスリム女性が自分のステイタスの高さを表現する手段のひとつであった。ところが最近では、経済発展を遂げたピラダリー・ムスリム女性（特にB部門の織工、鍛冶屋・大工・石工、肉屋といったピラダリーに属する女性）もザート・ムスリム女性と同じ慣習を採用するようになってきたのである。

(2) 境界を維持する社会慣行

前節では、C町のムスリム社会が観念上、上下に大きく区分されている様子を例示した。そうした区分は、互いに境界を創出・維持することで実現する。その方法のうちの主要なものとして、以下の3点があげられる。

①居住パターン：C町の住民は、厳密ではないにせよ、宗教別または集団別に住み分ける傾向にある。まず、人口にして約200人のシーア派サイヤドであるが、彼らの住居はマハル・サーダート（サイヤド地区）と呼ばれる一区画に集中している。ここにはC町の他の区画にはみら

れないシーア派独特の礼拝所と宗教施設がある。例外は4世帯だけであるが、彼らは今世紀の変わり目にスンナ派からシーア派に改宗した一家族の子孫である。次に、ヒンドゥー不可触民のうち、清掃カーストもやはり特定の区画に居住している。彼らはそこで食用として豚を飼っているため、この区画を嫌うムスリムも多い。彼らの居住区画については、1928年に発行されたC町の条例集にも記載が認められる。ここから、彼らは少なくとも今世紀初頭から特定の区画に集中して住んでいたことが推察されるのである。

C町の14居住区のかなには、「ヒンドゥー・エリア」または「ヒンドゥーの居住区」と呼ばれるほどヒンドゥー人口が多い居住区が2つある。さらに、人口約100人という少数派のシクは、移民としてC町に来たという背景をもつため、商業地区ではあるが外縁に近い部分に集中して住んでいる。このほかにも、村からの流入民によってC町の周縁部に新しく形成された区画では、ビラダリーやカーストごとの小さなコミュニティができてある。

②招待・訪問と共食：日頃から互いに家を訪ね合ったり、冠婚葬祭に招待したり参列したり、さらにそこで飲食を共にしたり、といったつきあいにおいて、ザート・ムスリムとビラダリー・ムスリムのあいだにはかなり大きな溝がある。そういった機会がほとんどないか、あるいは意図的につくられないのである。学校や職場など、両者が隣り合う場所は昔よりも格段に増えたはずである。しかし、そのような場面での交流は、一時的または限定的なものにすぎず、継続されることは稀である。特に結婚式をはじめとした冠婚葬祭に関しては、ザート・ムスリムとビラダリー・ムスリムの双方が、拡大親族関係を基盤としたサークルの内部に招待客を制限しがちである。ザート＝ビラダリーを超えた個人間の友好的な関係は確かに頻繁に観察されるけれども、それが拡大親族の領域にまでもちこまれることは極めて少ない。

③婚姻規制：子供の配偶者を選択する範囲ないしは婚姻に関する規制は、これから紹介するように、ザートとビラダリーの境界を維持する最も重要な装置となっている。なお、ここでの回答者は第2章と同じである。

サイヤド男性によれば、子供の「結婚相手にはサイヤドが最も好ましい。次がシェーフである。だが、ムガルやパターンとも、仕方がないときには結婚させる。かつてはシーア派サイヤドとも結婚は可能だったが、今は極めて稀になった。ビラダリーに属するムスリムとの結婚は普通にはありえないのだが、仮に子供が恋愛結婚したとしても勘当はしない。以下の条件さえそろっていればの話だが。つまり、その相手が紳士淑女であり、きちんとした仕事をもっており、健康で、容姿に問題がなく、家柄も悪くなく、当人同士の年齢も適当で、教育も十分に受けていれば。以上の条件が揃わない人との結婚の場合には、昔は『フッカ・パーニー・バンド』（以下「集団追放」と意訳する）⁽²⁹⁾ または絶交といった制裁があった。その子供を勘当していたわけだ。今でもそれが全くないとはいえない」。別のサイヤド男性も「結婚はサイヤド内部で、と努力する。だが、サイヤドとシェーフは同族 (*kuf*) であり、対等であり、同じ

だ。パターンとも結婚は可能だ。原則としては誰とでも結婚可能なのだが。つまり、道徳、品行、信仰心において申し分のない人であれば。それでもやはり部族 (*qabila*)、同族、一族 (*khāndān*) の内部で、という努力をする。なぜなら、家風の違う婚家では、少女が適応するのに困るから」。

シェーフ男性は、シェーフにとって結婚が可能な相手は、シェーフ、サイヤド、パターンであると語った。別のシェーフ男性によれば、シェーフの「結婚は、サイヤド、シェーフ、パターンのあいだでのみ行われる。だが、そうしなかったからといって何か制裁があるわけではない。当事者の近親者が激怒するだけだ」という。パターン男性によると、パターンにとって「結婚はスンナ派サイヤド、シェーフ、ムガル、パターンのあいだで行われるのが普通」であるという。このパターン男性の妻は、ザートの的にはシェーフである。

次に、ビラーダリー・ムスリムの場合をみていこう。織工ビラーダリーにとって「婚姻はビラーダリー内婚が原則」である。鍛冶屋・大工・石工ビラーダリーにおいても「ビラーダリー内婚率は95%である。ビラーダリーの成員は、内婚規則の違反者に対して、激怒はするものの『集団追放』は行わない。その人が金持ちであれば異なるカースト (ザート＝ビラーダリー) の人と結婚をしても何もいわれないけれども、その人が貧乏だと非難される。確かに、昔は『集団追放』があった」。肉屋ビラーダリーのあいだでも「婚姻はビラーダリー内婚が原則であるが、違反しても『集団追放』といった制裁はない」という。

菓子屋ビラーダリーでは「ビラーダリー内婚が普通だが、現在はそれに関する決まりがあるわけではない。40年くらい前までは違反者に対して『集団追放』も罰金もあった。違反者はビラーダリー成員の前で謝って、許しを請うていたものだ」。油屋ビラーダリーの場合、「ビラーダリー内婚が普通である。25年くらい前までは違反者に対して『集団追放』があった。今は拘束力のある決まりはなく、自由である」という。洗濯屋ビラーダリーにおいては「ビラーダリー内婚が規則として存在しているわけではないが、多くの場合が内婚」である。

造り酒屋ビラーダリーに属する男性によれば、「昔はビラーダリー内婚が絶対的だった。今では、アンサーリー (シェーフまたは後述する織工ビラーダリーのいずれか)、サイヤド、シェーフザデー (シェーフ) とともに結婚するようになった」という。しかしながら、造り酒屋ビラーダリー男性によるこの言葉には重大な問題がある。それに関しては、次章で詳しく論じたい。

旅館・飲食店ビラーダリーにあっては「ビラーダリー内婚は絶対的である。ビラーダリー内婚規則に違反すると、その夫婦のあいだに生まれた子供の結婚に問題が生じる。それゆえ、誰もビラーダリー外部の人と結婚しようとしなない」のだという。このビラーダリーの場合、内婚規則の違反者に対しては、昔は「集団追放」が行われていたものの、現在では一緒に食べたり飲んだり、家を訪問し合ったりすることをやめる程度であるという。なお、この制裁の対象になるのは違反者とその家族のみで、オジなどの親戚にまで制裁が及ぶことはないという。

土器造りビラーダリーにおいては「多くの結婚がビラーダリー内部で行われているけれども、それ（内婚）は暗黙の了解事項であり、明白な規則として存在しているわけではない」。その理由として、彼は、このビラーダリーの男性のなかには他都市の鍛冶屋ビラーダリー女性と恋愛結婚した人がいるが、彼らには何の制裁も加えられなかったという事実をとりあげた。しかしながら、そのあとで彼は「だからといってビラーダリー外部者との結婚がビラーダリーの皆から歓迎されているわけではない」と付け加えた。

綿屋ビラーダリーでは「ビラーダリー内婚は絶対的であるが、それ以外には特別な規則はない。ビラーダリー内婚をしなかった成員に対しては『集団追放』、罰金、鞭打ちといった制裁が加えられた」という。仕立屋ビラーダリーでは「ビラーダリー内婚に関する規制が、昔はあったが今はほとんどない」。この仕立屋ビラーダリー男性の2人目の妻は、異なるビラーダリー（後述する吟唱詩人・系図詠みビラーダリー）の女性である。染屋ビラーダリーの男性によれば、「結婚はひとつの部族内でのみ行われる。そうでなければビラーダリーの成員から激怒されるのだろうが、これまでに異なるビラーダリーとの婚姻の例がないので分からない」という。

床屋ビラーダリーにおいては「ビラーダリー内婚は絶対的である。というのも、C町は小さな町なので。大きな町や都会では他のビラーダリーの人と恋愛結婚している例もみられる。制裁の方法は『集団追放』で、つきあいを絶たれ、結婚の輪にも入れてもらえなくなる」。牛乳屋ビラーダリーのあいだでも「ビラーダリー内婚は絶対的」であり、「異なるビラーダリーの成員と結婚した場合には『集団追放』の目にあって、ビラーダリーから追放される」。けれども、内婚は、現在では規則として存在しているわけではないという。腕輪屋ビラーダリーでは「ビラーダリー内婚は絶対的」であり、それに背くと「集団追放」される。

給水ビラーダリーでは「多くの結婚がビラーダリー内部で行われている。分離独立まではそれが規則だったが、今ではそうでもなくなってきている」。なお、この回答者の近親者は、織工ビラーダリーの女性と近々結婚する予定であるという。楽隊ビラーダリーでも「ビラーダリー内婚は絶対的」である。また、吟唱詩人・系図詠みビラーダリーにおいても「多くがビラーダリー内婚である。そのため、必然的に他の町から配偶者を探すことになる（前述のようにC町には回答者の家族しか居住しないため）。だが、ビラーダリーの異なる人との結婚に際しても、特に抗議や反対はない」らしい。実際、この回答者の娘のうちの1人は、先述の仕立屋ビラーダリー男性の2人目の妻となった。最後に、物乞いビラーダリーにおいても「ビラーダリー内婚は絶対的で、ビラーダリー内婚に背くとつきあいが絶える」ことになるという。

さて、以上をまとめると次のようになる。a) ザート・ムスリムにおいては、各ザート内での婚姻を最も好ましい形態だとするものの、他のザートとの婚姻も可能であると考えられており、実際に異なるザート同士の婚姻もよく生じている。b) ビラーダリー・ムスリムのあいだ

では、ビラダリー内婚が原則ないしは規範として残っているか、あるいはかつてよりもその拘束力は失われてきているかのどちらかであるが、事実上、いまだに多くの成員が内婚を遵守している。c) ザート・ムスリムとビラダリー・ムスリムのあいだでの通婚は極めて稀である。

第2章で述べたように、ヒンドゥー社会のカースト合議制に相当する組織は、どのザートにも存在しない。ビラダリーの場合、かつて存在していたか、あるいは現在でも活動が認められる「ビラダリー組織」は、カースト合議制的な性格を強くもつものである。この組織がうまく機能しているかどうかということも、内婚の遵守と深く関わっていると思われるのである(別表参照)。

(3) サイヤドの特殊性

サイヤドは、次章でも詳しく論じるように、預言者ムハンマドの一族に連なる血統を有するとされる。この血筋のゆえに、サイヤドは、インド・ムスリム社会では特殊な社会的地位を享受している。C町のムスリム社会も例外ではない。

①喜捨と奉仕の授受関係：サイヤドとその他のザート・ビラダリーという区分は、宗教性を帯びた社会慣行において決定的である。例えば、喜捨という宗教行為には、ザート=ビラダリーの属性に関連した法則がある。理想的には、喜捨は、ザート=ビラダリーの属性の高いほうから低いほうへと一方向的になされるものようである。これに関連して、あるシェーフ女性は悩みごとを抱えていた。彼女によれば、あるサイヤド男性が亡くなって、ザートの的にはシェーフである妻と、子供2人が後に残された。彼女は未亡人とその子供らを気の毒に思い、金銭的に助けることを決意した。しかし、父系リネージの観念が強い北インド・ムスリム社会では、ザート=ビラダリーの属性が異なる婚姻によって生まれた子供は父の属性のみを受け継ぐため、実際には子供のために使ってほしいお金であっても、子供はサイヤドなので喜捨をすることができない。結局、彼女は、シェーフである未亡人に対して喜捨をして、彼女に母親としての立場から、サイヤドである子供のためにお金を使ってもらおうと考えることで自分を納得させたのである。

この事例から、この社会では、サイヤドに喜捨をすることはできないと考えられていることが分かる。経済的に恵まれないサイヤドを救済する場合には、それゆえ、上記のような方法もあるのであるが、一般的にはサイヤドのために用意された金品に対して、喜捨という言葉の代わりに贈与を意味するアラビア語ハディヤ (*hadiya*) を採用することで問題は解決される。このハディヤという言葉は、北インドでは聖クルアーンの代金を指す言葉でもある⁽³⁰⁾。つまり、サイヤドを救済するための金品と聖クルアーンの代価とが同じ言葉で表現されるのである。さらに付け加えるとすれば、サイヤドに提供されるのはいつも金品とは限らない。あるシェー

フ男性は「サイヤドに奉仕すると善果 (*sawāb*) がある」といって、特定のサイヤドの家によく出入りしている。

②サイヤドの婚姻：80代のあるシーア派サイヤド女性は、サイヤドがムスリム社会において、いかに高貴で特殊な位置を占めるものであるかを説く。彼女の話の要旨は次のとおりである。サイヤド女性はサイヤド男性と結婚すべきであるが、そうしなかったあるスンナ派サイヤド女性は不幸に見舞われた。すなわち、そのサイヤド女性はシェーフ男性と結婚したのであるが、彼女の実の父はその翌年に亡くなった。また義理の父もその数年後に亡くなった。しばらくして義理の弟も病死し、そしてこの度（調査当時1996年春）、彼女の夫も急死した。これはまさに彼女の正しくない結婚が招いた不幸である。傍らで話を聞いていた彼女の息子は、そんな馬鹿げた解釈があるものかと笑っていたけれども、このシーア派サイヤド女性は言外に、ヒンドゥー的な意味での下降婚はサイヤド女性にとって避けるべきものだといっているのである。これを裏付けるかのように、サイヤド男性と結婚したあるシェーフ女性は、「サイヤド（男性）と結婚するのは名誉 (*izzat*) なことだ」と話し、上昇婚的な婚姻の合法性をほのめかした。

4. ザートおよびビラーダリーの名称の由来

ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムのあいだの深い溝は、これまでにみてきたとおりである。両者は社会生活の様々な場面で区別され、上下に序列づけられ、また互いに境界を維持しようとしている。両者間の断絶は、その名称が物語る一族ないしは集団の起源にも反映されている。すなわち、ザート・ムスリムは「外国起源」、ビラーダリー・ムスリムはインド起源という具合に、両者は大きく二分されるのである。しかしながら、幾つかのビラーダリーは名称を変更することで「外国起源」を主張するようになった。そうしたビラーダリーの新しい名称には、ある一定の傾向または特徴がある。第2・3章とほぼ同じ回答者によって語られた改称後のビラーダリー名とその由来を以下にあげてみたい。比較のために、まず各ザートの名称の由来からはじめよう。

【A部門】

[サイヤド] サイヤドは、預言者ムハンマドの娘ファーティマと父方従弟アリーのあいだに生まれた2人の息子ハサンとフセインに系譜を遡りうる。いわゆる「預言者の家族」の子孫である。系譜上、長男ハサンの系に連なるハサニー・サイヤドと、次男フセインの系に連なるフセイニー・サイヤドに大別されるが、いずれもファーティマの血を引くファーティミー・サイヤドであることに変わりはない。これに対して、アラヴィー・サイヤドといわれる一族がある。それは、アリーがファーティマ以外の女性とのあいだにもうけた子供の子孫である。しかし、

C町のサイヤドによれば、ファーティミー・サイヤド以外はサイヤドとはいえない。

[シェーフ] シェーフは、預言者ムハンマドゆかりの地であるメッカおよびメディナにおける初期のムスリムに系譜を遡りうるとされる父系的な一族である。従って、シェーフ・カテゴリーに属する人々の祖先は、大きくアンサール（「援助者」の意。メディナの住民を指す）とムハージーン（「移住者」の意。メッカなどからメディナへ入植した人々）に分けられる。前者の子孫は一律にアンサーリーと呼ばれるが、後者の子孫は祖となる人物の属性ないしは預言者との距離によって、次のような下位カテゴリーに区分される。対内的にランクの高い順から、①クレーシー（預言者ムハンマドを輩出したメッカのクライシュ族に起源を遡るとされる人々）、②スィッディーキー（初代正統カリフ、アブー・バクルの子孫）、③ファールキー（2代正統カリフ、ウマルの子孫）、④ウスマーニー（3代正統カリフ、ウスマーンの子孫）となる。これらに続くのが先述の⑤アンサーリー（預言者の教友たちの子孫）であり、最後に⑥ハーナザード・シェーフ（シェーフ男性と「奴隷」女性の子供の子孫）がくる。

[パターン] パターンの祖先は、前にも述べたようにアフガニスタンまたはパキスタン北西辺境州の出身である。彼らの「祖先は約300年前、ムガル朝4代皇帝ジャハーンギールの時代（在位：1605-27）にアフガニスタンからインドにやって来た」のだという。

【B部門】

[織工：モーミン・アンサーリー(*mōmin ansāri*)] 「預言者の時代に、綿布を織る部族があった。アユーブ・アンサーリーという人はその部族に属していた。ある時、預言者が彼の家の近くを通りかかった。皆が預言者に自分の家に泊まって下さいといった。預言者は自分のラクダの行きたがるところに泊まると答えた。そのラクダはアユーブ・アンサーリーの家の前に行った。預言者は約束通りに彼の家に泊まった」。

[鍛冶屋・大工・石工：サイフィー(*saiḥī*)] 「昔、アラブにアブー・サイフという人がいた。彼は預言者ムハンマドの教友だった。預言者の息子のうちの1人はわずか2～3歳で死んだが、その子に乳を飲ませていたのがアブー・サイフの妻だった。アブー・サイフの職業は鍛冶屋だった。それゆえ、鍛冶屋を伝統的職業とするインドのムスリム集団ロハールは、1970年代に、彼の名前にちなんでピラードリー名をサイフィーに変えた。サイフィー・ピラードリーと彼とのつながりは、職業上の系譜によるものであって血統上の系譜によるものではない」。

〔肉屋：シェーフ・クレーシー(*shekh qureshī*)〕「ヤミーヌブッラー・マフムード・ガズナヴィー(969-1030)とその一行がインドに来た時、インドにはムスリムはいなかった。彼らは肉食を好んだので、食べ物に不自由した。そこでガズナヴィーは、アラブから一緒に来ていた人たちのうちの70人くらいに屠殺業に従事するよう命じた。この屠殺業に従事しはじめた人たちはクレーシーと名付けられた。我々の民族はその時以来のものである。非常に古い民族で、もともとアラブの部族である」。

【C部門】

〔造り酒屋：シェーフ・スィッディーキー(*shekh siddīqī*)〕このピラーダリーに属する回答者からは、ピラーダリー名の由来に関する説明を受けることはできなかった。前章の婚姻規制の項でも述べたように、彼らは「本物の」シェーフとして自らを語りたがったのである。ところが、ある「本物の」シェーフ男性によれば「自分たちはシェーフのなかでもクレーシーだが、あのチクワー（ペルシャ語で肉屋）たちとは違う。それに、この辺り（C町とその周辺地域）ではシェーフ・スィッディーキーというと（初代正統カリフ、アブー・バクルの子孫ではなく）、造り酒屋ピラーダリーを指すことになるから注意が必要だ」という。

〔土器造り：カスガル(*kasgar*)〕「クムハールという名前は職業上のもので、出自的にはカスガルである。カスガルというのはトルコ（中央アジア）に住んでいた民族の名前なのだが、この民族はかなり昔にインドに移住してきた。彼らの子孫がカスガルと名乗っている」。

〔綿屋：マンスーリー(*mansūrī*)〕「昔、イラクに住んでいたマンスールという名前のスーフィー（イスラーム神秘主義者）は、視線で綿をすくという奇跡を起こした。このスーフィーの奇跡にちなんで、このピラーダリー名がついた」。

〔仕立屋：イドリースィー(*idrīsī*)〕「仕立屋にも2種類ある。ひとつは仕立屋の家系、つまり血統上の仕立屋であり、ずいぶん昔にトルコ（中央アジア）で改宗し、その後インドに来た人たちの子孫である。彼らは名前にイドリースィーという語を付けることがある。イドリースィーは預言者のひとり、職業は仕立屋だった。もう一方の仕立屋とは、自分で仕事を習って開業した仕立屋である」。

〔染屋：サッパーキー(*sabbāqī*)〕「我々の祖先は、シャハーブッディーン・ゴウリーの部族および軍隊と一緒に、ファルガーナ（現ウズベキスタン東部地域）からインドに来た。約800年前のことである」。

[床屋：サルマーニー(*sarmānī*)]「神が世界をお創りになった時、アダムもお造りになった。そして、ひとりの天使をアダムのもとに送った。その天使の名前がサルマーンだった。まもなく、アダムの身体と顔に毛が生えてきた。その天使の仕事はアダムの顔を美しくしておくことにあった。神がそう命じていたのだ。当時は剃刀などがなかったので、よく研ぎすました石で剃った。その時から、この民族の名前はサルマーニーとしてとおっている」。

[給水：アッパースィー(*‘abbāsī*)]「預言者ムハンマドの父方祖父アブドゥル・ムッタリブがザムザムの泉を発見した。彼はメッカ大巡礼をする人たちに水を飲ませる仕事を、息子のアッパース(預言者の父方オジ)に命じてさせた。こうしたわけで、この仕事に従事する人はアッパースィーと名乗るのである。アッパースの一族は、インドの地に政権を樹立した。その子孫がインドに広がった。彼らが我々の祖先である。つまり、アッパースィーとは一族の系譜である。ビヒシュティとかサッカーというのは、他人が呼ぶ名前である」。

【D部門】

[物乞い：シェーフ・アラヴィー(*shekh ‘alavī*)]「政府の登録簿では、我々はファキールとなっているが、自分たちのあいだではシェーフ・アラヴィーである」。

以上のような新しいピラーダリー名の由来に関するC町の住民の言説のなかには、北インドの他の地域の同一ピラーダリーに関する調査報告や「史実」とは一致しない点もある。その問題の検討は別稿に譲ることにして、ここではこのC町型のピラーダリー名の由来を分析の対象とする。

第1の特徴として、言説への登場者を基準とするならば、それは大きく2つに分けることができる。ひとつは預言者ムハンマド自身の近親者や教友、高名なスーフィー聖者、天使、ムハンマド以外の預言者といった宗教的な意味をもつ存在であり、もうひとつはインドに侵攻してきたムスリム軍事勢力や移住者といった、直接宗教とは結びつかないまでも、当時、既に「イスラーム化」されていた「外国」に起源を有する人物または部族・民族である。いずれにせよ、そのどちらもがインド起源ではないことに注目すべきである。

第2の特徴は、ザート名が特定の人物や部族からの「出自」の指標であるのに対して、ピラーダリー名の由来が、主として特定の人物や部族の職業や行為にあることである。また、血統上のつながりを主張する場合でも、やはり職業や行為の同一性を強調するのは、そもそもピラーダリーが職能集団であることと関連しているのであろう。だが、別の見方をすれば、血統上のつながりのみを主張することができないような社会的圧力が、そこには働いていたのかもしれない。

第3の特徴は、新しいビラーダリー名のなかには、「本物の」シェーフと混同されるような紛らわしいものも少なくないことである。例えば、造り酒屋ビラーダリーの新名称シェーフ・スィッディッキーは完全に自称であり、また「本物の」スィッディッキー族との同化を目指しているようである。さらに、織工ビラーダリーの新名称アンサーリー、肉屋ビラーダリーの新名称シェーフ・クレーシーも非常に紛らわしい。他方で、当該ビラーダリーの成員が自称または主張しているわけではないのだが、楽隊ビラーダリーは「シェーフ・タパールチー」または「パージャーワレー・シェーフ（楽器を演奏するシェーフ）」、吟唱詩人・系図詠みビラーダリーは「ハーン・サーハブ」と称される。この場合、前者はシェーフ、後者はパターンというザートを連想させる。C町の住民は、楽隊ビラーダリーと吟唱詩人・系図詠みビラーダリーをそう呼ぶことで、彼らに敬意を払うのだという。

このように、幾つかのビラーダリーが主としてシェーフ・カテゴリーを侵食する一方で、サイヤド・ステイタスにつながるようなビラーダリー名は全く主張されない。つまり、預言者の近親者や教友に言及するものはあっても、「預言者の家族」に関わるような主張は一切なされないのである。これは、「預言者の家族」に関する伝承がほぼ確立されたものであるのに対して、預言者の教友にまつわるエピソードは無数にあり、また実際に様々な職業に従事していた教友が存在するためだとも考えられるが、前章でも述べた「預言者の家族」の子孫であるサイヤドの特殊な位置づけを考慮するならば、サイヤドへの敬意の表明ともとれる。

5. 序列の論理、そして差異化へ

(1) ザート＝ビラーダリー・システムにおける序列の論理

C町のザート＝ビラーダリーに関する以上のような情報を、ひとつのシステムに統合しうる論理があるとすれば、それは一体どのようなものだろうか。C町のムスリム社会における諸集団の序列の論理とでもいべきものを、ここで明らかにしていこう。

最初に事実確認をしておきたい。C町のムスリム社会の特徴として、次の諸点を認めることができた。a) ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムの区別は絶対的である。b) ザート・ムスリム間のランキングは、非常にはっきりとしている。c) ビラーダリー・ムスリム間のランキングは、B～Dの3部門に分けることができるものの、B・C部門内部のランキングは曖昧である。

まずa) について、ザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムの絶対的な区別は、一族ないしは集団の「起源」がインド（ないしはヒンドゥーの地）の内であるか外であるかを基準としており、それはザートおよびビラーダリーの名称に直接反映されていた。すなわち、前者の名称がイスラームの歴史に登場する「外国起源」の人物や部族に由来するものであるのに対し

て、後者の名称は土着の「伝統的」職業と密接に結びつき、ヒンドゥー職能カーストの名称と、同じである場合も少なくなかった。ところが、後者のうちの幾つかは、そういった名称をザート・ムスリムに匹敵する「外国起源」的なものに変更するようになった。このようなピラダリー名の改称は、ザート＝ピラダリーの序列が「起源」を評価基準のひとつに数えていることを裏付けるものだといえる。その際、特に注目すべきはB部門の織工ピラダリーである。彼らは、今日のC町で新しい名称の由来を語るとき、具体的な人物名を出すとともに、その人物とのあいだの職業上のつながりだけでなく血統上のつながりもほめかす。しかしながら、このピラダリーが19世紀末に「モーミン・アンサーリー」と改称した折には、特定の部族とのあいだの職業上のつながりのみが主張されていたようである（Goodfriend 1983: 128-129）。この変化は、血統上のつながりが職業上のそれに優越することを示しているといえよう。同じことが、肉屋、土器造り、仕立屋、染屋、給水ピラダリーにもあてはまる。

次にb) について、ザート・ムスリム間でのランキングがサイヤドを頂点とすることは、社会的な文脈では、ザート・ムスリム間での通婚に際してサイヤドとの婚姻に上昇婚（サイヤド男性と他のザート＝ピラダリー女性の結婚）または下降婚（サイヤド女性と他のザート＝ピラダリー男性の結婚）の観念が存在すること、宗教的な文脈では、喜捨や奉仕の授受関係においてサイヤドが特殊な位置を占めることによって明らかである。さらに、サイヤド以下のランキングが、シェーフ、（ムガルならびに）パターンという順であることは、各ザートの祖となる人物と預言者または「預言者の家族」とのあいだの「親密さ」、別の角度からみればイスラームへの改宗の早さが序列の基準となっていることを示唆している。

最後にc) について、19のピラダリーをB～D部門に分類する基準は、集合体としてのピラダリーの現在の経済状態のようである。例えば、B部門に分類される鍛冶屋・大工・石工ピラダリーは、かつてはラグダールと呼ばれ、カミンより上位に位置づけられたものの、それほど高い地位にあったわけではなかった。ところが、製糖工場で使用される機械や部品の製作・販売・修理といった、彼らの「伝統的」職業と関連した鉄に関わる仕事の需要が増してからは、このピラダリー全体が活気にあふれるようになった。収入も増え、なかにはC町で一番の大金持ちになる一族も現れた。その結果、彼らのピラダリーの地位は上昇し、時期を同じくしてピラダリー名の改称も行われたのである。同様にして、物乞いピラダリーがD部門、すなわちC町のムスリム社会の底辺に位置づけられるのも、彼らの経済的地位によると考えられる。従って、物乞いピラダリーの経済的地位がさほど悪くはない社会では、そのピラダリーの地位も最下位とはならない（例えばAnsari 1960, S. Ahmad 1970）。これらの点から、ピラダリー・ランキングには経済的階級の観念が存在することが分かるのである。

他方、B・C部門内部のピラダリー・ランキングの曖昧さは、各ピラダリーが同等の経済的地位にあることだけでなく、ほとんどの婚姻がピラダリー内婚であることと関係してい

るかもしれない。というも、あるザート・ムスリム女性によれば、異なるピラーダリー間を女性が移動しないことで、上昇婚の婚姻（女性の婚家の儀礼的優位と女性の生家の儀礼的劣位）によるピラーダリー間の儀礼的優劣関係（つまり、ピラーダリーの地位の上下関係）の成立が組織的に防がれている可能性もあるからである⁽³¹⁾。

以上をまとめると、C町のムスリム社会における序列の論理は、次のようにとらえることができる。①預言者ムハンマドとの距離、またはイスラームへの改宗順。すなわち、「預言者の家族」の子孫（サイヤド）を頂点とし、預言者と直接・間接的に接触してイスラームに改宗した正統カリフ、教友、そして預言者を輩出した部族に連なる出自の「系譜」を有する人々（シェーフ）、イスラームをもたらした王朝や軍事勢力と共にやってきて、ともかくもインドの地を踏む以前にイスラームに改宗していた人々の子孫（ムガルとパターン）、そして以上の人々よりも遅くイスラームに改宗した人々（インド起源の改宗ムスリム職能集団）といった順序。②一族または集団の起源を語る際に用いられる「系譜」には、血統上のものと職業上のものがあるが、前者を強調するザート＝ピラーダリーのほうがランキングは高い。③経済的地位は、主にピラーダリーのランキングを決定する際に重要な指標となる。従って、ザート・ランキングが生得的で固定的であるのに対して、ピラーダリー・ランキングはある程度まで獲得的で流動的である。しかしながら、獲得された経済的地位は、代表的にはピラーダリー名の変更というかたちで、イスラーム的な語法に置き換えられて表明される。ここに、C町そして北インド・ムスリム社会のザート＝ピラーダリー・システムの特徴があるといえるのである。

南インドのムスリム一族の調査を行ったVatukによれば、その一族の成員にとって、祖先がいつ、どこから来たか、そして祖先は預言者ムハンマドとどのような系譜上のつながりがあったのかということは極めて重要な問題だという（Vatuk 1996: 235）。C町のムスリムにも、これと同様のことがいえるだろう。というも、彼らは、最終的には預言者の周辺に遡りうる「系譜」の発見を試みているように思われるからである。

(2) 序列から差異への強調点の移行

ところで、その「系譜」発見と関連して、改称後のピラーダリー名が「外国起源」を示唆しうるものであることは、ピラーダリー・ムスリムがザート・ムスリムを模倣対象に設定し、その地位をザート・ムスリムのレベルにまで上昇させようとする動きとみなしうる。この場合、ピラーダリー名の改称は、いわゆる「上位模倣」によるステイタス・モビリティのひとつととらえることができる。

インド社会研究において、上位模倣によるステイタス・モビリティの研究に先鞭をつけたのはSrinivas (1952, 1972[1966])である。彼は、ヒンドゥー中間カーストの成員が、権力または財の蓄積をととして世俗的な地位を高めたときに、ブラーマンの慣習や生活様式を模倣する

ことによってカースト的地位をも向上させようとする試みを「サンスクリット化 (sanskritization)」という言葉で表現した。石井 (1993) が指摘するように、このサンスクリット化という概念は、他の研究者によって次第に拡大解釈されるようになり、必ずしもカースト的地位の上昇とは関係のない文脈で、「大伝統の拡散」と同義のものとしても用いられるようになった。だが、分析概念としては両者を厳密に区別する必要がある。そのため、石井は、カースト的地位の上昇に関わる本来の用法を「狭義のサンスクリット化」, 「大伝統の拡散」と同義の用法を「広義のサンスクリット化」と呼んでいる (石井 1993: 85)。

Srinivasの提唱したサンスクリット化の概念を、北インド・ムスリム社会の分析に応用したのはVreede de Steurs (1968) である。彼女は、ヒンドゥー社会のサンスクリット化に匹敵する概念として「イスラーム化 (islamization)」と「アシュラーフ化 (ashrafization)」という概念を提出した。アシュラーフとは「高貴な身分のムスリム」を指しており、北インドでは「外国起源」のムスリム、すなわちザート・ムスリムを意味する (第3章参照)。Vreede de Steursによれば、「イスラーム化」とは、いわゆる非イスラーム的な諸慣習や諸慣行を (「よりイスラーム的」な方向へと) 純化することによって、諸集団または諸個人が自らを非ムスリムと明確に区別しようとする過程を指すものである。他方、「アシュラーフ化」とは、上昇婚ならびにより高い階級 (の人々) の生活様式を採用することによって、諸集団または諸個人が社会的上昇を試みる過程を指している (Vreede de Steurs 1968: 6)。上記のサンスクリット化と対比すれば、「イスラーム化」は「広義のサンスクリット化」, 「アシュラーフ化」は「狭義のサンスクリット化」とほぼ一致する概念だといえるだろう。

Vreede de Steursが呈示した「アシュラーフ化」の概念について、I. Ahmad (1978[1973] b) とMann (1992) は、北インド・ムスリム社会におけるステイタス・モビリティの存在と、そのモビリティが何らかの上位模倣によって達成されうるものであることを認める。しかし、彼らは上位模倣の対象としてのアシュラーフ像に疑問をなげかける⁽³²⁾。

C町においても、ピラーダリー・ムスリムのなかでも最上位のB部門の織工、鍛冶屋・大工・石工、肉屋といったピラーダリーに属する女性たちは、近年になってもともとザート・ムスリム女性の慣習であるパルダを採用し、徹底的に遵守するようになった (第3章第1節参照)。また、筆者はかつて鍛冶屋・大工・石工ピラーダリーの婚姻儀礼に伴う贈与交換について論じた際に、ジャヘーズまたはダヘーズと呼ばれる花嫁持参財の贈呈が、ザート・ムスリムの慣習を模倣したものであることを指摘した (小牧 1997)。このように、C町のムスリム社会にも確かにステイタス・モビリティは存在しており、そのモビリティは上位模倣によって達成されているとみることができる。

だが、他方でC町のピラーダリー・ムスリムにとってアシュラーフないしはザート・ムスリムは、もはや上位模倣の絶対的な対象ではない。その理由は、今世紀半ば以降に生じた社会変

化を追うだけで十分である。有力なザート・ムスリムの減少（パキスタンへの移住）、普通選挙制度の導入、農地改革による大土地所有制の廃止、商工業の重要度の増大、近代教育制度の拡充、そしていわゆる「新中間層」（多くは高学歴のビラダリー・ムスリム）を支持母体としたイスラーム復興運動の展開によって、集合体としてのザート・ムスリムは、政治経済的にも文化宗教的にもビラダリー・ムスリムの模倣対象としての「上位」存在ではなくなってきた。しかも、C町の裕福なビラダリー・ムスリム女性は、Vreede de Steurs (1968)の事例とは異なり、ザート・ムスリム男性との上昇婚よりもむしろ、ギルド的性質を帯びたビラダリー組織の内婚規則を遵守し、同一ビラダリーの裕福な一族の男性と結婚する傾向にある。

こうした状況下で進行する上位模倣、特にビラダリー名の改称は、確かにVreede de Steursが論じる「アシュラーフ化」では説明できない。つまり、名称のみの「アシュラーフ化」は、地位の「アシュラーフ化」を意味しないばかりか、逆説的にアシュラーフという概念そのものを曖昧にする可能性を秘めているのである。もっと具体的にいえば、例えばI. Ahmad (1978[1973]b)の事例報告には、もともと高カースト・ヒンドゥーであった改宗ムスリムの一族が、移住先の大都市で、上昇婚と小規模な婚姻サークル内での結婚を組み合わせた「婚姻戦略」を数世代続ける一方で、衣服や慣習を地元のシェーフのように変えていくことによって、漸次的にステイタス・モビリティを達成し、最終的に周囲の人々からシェーフとして承認されるようになるまでの様子が描かれている⁽³³⁾。C町のビラダリー全体を見渡すならば、このような手続きを経ない単なるビラダリー名の変更、ないしは名称のみの「アシュラーフ化」の存在が明らかになる。この種の「アシュラーフ化」は、アシュラーフの「日常化」、そして最終的にはアシュラーフ概念の混乱につながるとは考えられないだろうか。

アシュラーフという「聖域」への侵食といってもよいこの現象は、実体としてのアシュラーフ（「外国起源」のザート・ムスリムというカテゴリー）を解体することで、「起源」本位のザート＝ビラダリーの属性を無意味なものとし、全てのムスリム（ザート・ムスリムとビラダリー・ムスリムの双方）をそのシステムから解放する。そのとき、このムスリム社会の社会構造の構成原理には、序列または不平等のイデオロギーではなく、差異もしくは平等のイデオロギーが支配的なものとなって浮上するのである。

もちろん、C町のムスリムの平等意識は、ムスリム社会内部で完結しているわけでは決してない。ヒンドゥーをはじめとした異教徒ないしは「他者」の存在、そして、とりわけヒンドゥー清掃カーストという不可触民の存在なくして語ることはできない。すなわち、非ムスリムの存在、ならびにC町のムスリム社会には不可触民が存在しない（ヒンドゥー社会からの不可触民の借用）という事実もまた、ムスリム同胞の平等意識に大きく加担しているのである。

以上のように、C町のザート＝ビラダリー・システムは、基本的には序列化のシステムだということができる。しかし、それはムスリムを常に上下に固定的に配列するだけのシステム

ではない。差異化のメカニズムが機能するときには、ムスリムは水平に配列され、イスラームの平等主義的エートスもまた発現しうる。ひとつのシステムのなかに相矛盾するベクトルを内包した一見不安定なこの構築物は、私的な領域では序列を意識しながらも公的な領域では差異を主張するといったように、強調点を移行させることで成り立っている。序列化と差異化という対立する両者の架橋となるのは、このシステムにおいては、イスラーム的な語法である。つまり、非イスラーム的だと評されるこのシステムに、イスラーム的な意味づけと解釈をほどこしたり表明させたりするところに、ザート＝ビラーダリー・システム固有の論理を見出すことができるのである。

おわりに

本稿では、北インド、ウッタル・プラデーシュ州西部C町のムスリム社会の事例に基づいて、ザート＝ビラーダリー・システムのあり方を記述し、分析した。その結果、このシステムが旧来の価値体系を維持しつつも新しい価値体系を受容することで、序列化と差異化の機能を同時に備えるようになったことが明らかとなった。それは、上からの動きというよりも、むしろ下からの突き上げによるものであった。社会の下方に位置づけられていたビラーダリー・ムスリムは、二重の意味での差異化（非ムスリムとの差異化、およびムスリム間の平等性の主張）を試み、ある程度までそれを実現させたのである。とりわけ、アンサーリー（織工ビラーダリー）、サイフィー（鍛冶屋・大工・石工ビラーダリー）、クレーシー（肉屋ビラーダリー）は、この闘いの勝利者だといえる。今日のC町では、彼らを旧来の名称で呼ぶことは無礼だとされており、少なくとも公的な領域では新名称が浸透している。その成功の背後には、「伝統的」職業を現代に適応させることで、集団としてのアイデンティティは保持し、さらに蓄財を重ねたうえで新名称を承認させるといった手続きがあった。ここにおいて、イスラーム的中心に自己を重ね合わせる態度は、ザート・ムスリムだけに許された特権ではなくなったのである。こうした下からの突き上げに対する上からの反応は、あるサイヤド男性の次のような言葉に集約されている。「ムスリムが自他の区別を認識できるようにするために神によって創られた集団、すなわち部族や一族は皆平等である」。

ザートとビラーダリー間の境界は、なおも根強く維持され続けている。けれども、私的な場ではともかく、公的な場ではザート＝ビラーダリーの序列は主張されなくなってきた。この変化を、世界的なイスラーム復興運動現象や「イスラーム化」の潮流と同一視することは難しいかもしれない。しかし、「土着」のシステムが、イスラームの歴史との関わりにおいて再規定されるというザート＝ビラーダリー・システムの今日的状況は、やはり地域を超えた視点からの説明を必要とする。この動きがいつ、いかなる契機をもってはじまり、北インド全体に普及

していったかという問題は、19世紀末から20世紀初頭、インド・パキスタン分離独立前後、1970年代といった、それぞれの時期におけるイスラーム改革主義者の運動や啓蒙書を参照することで新たな展開をみることができるだろう。

註

- (1) この問題については、Barth(1962[1960]), Leach(1962[1960]), I. Ahmad (1978[1973]a, 1985[1976]), Lindholm (1986)などを参照のこと。
- (2) Vatukは、ヒンドゥーとムスリムの社会成層の形態は表面的には似ているけれども、後者には社会学者の論じる「カースト」・システムの定義に合わない点があると主張する (Vatuk 1996: 228)。しかし、そのいずれもが、既にヒンドゥー・カースト・システム論においても疑問視されている。
- (3) 北インド、ウッタール・プラデーシュ州西部、アリーガル市のムスリム社会を調査研究した Mannも、この用語を用いている (Mann 1992)。
- (4) 本稿の基礎となる現地調査は1995年3月30日から1997年3月19日までの北インド滞在中に、インド政府奨学金と渋沢研究助成金による援助で行われた。調査の段階ではJamia Millia Islamia 大学 (ニューデリー所在) のDr. S. M. A. Rizviに公私にわたってお世話になった。構想の段階では南アジア地域研究懇話会 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)、関西南アジア研究会 (大阪外国語大学)、南アジア研究合宿、田中雅一研究室 (京都大学人文科学研究所) で発表の機会をいただき、多くの方々から貴重なご助言を賜った。さらに、現地の方々からは調査への理解と惜しみない協力をいただいた。記して皆様方に深謝申し上げたい。
- (5) 近年、C町には近郊村落からの移住者が増えているため、実際の人口はこれよりも多いと考えられる。
- (6) 宗教別人口比は、1995年11月の「投票予定者名簿 (voters' list)」から推定すると、24選挙区の投票予定者36,330人のうちムスリムは24,106人 (66.4%)、非ムスリムは12,224人 (33.6%) である。なお、C町には全部で25選挙区があり、そのうちの1選挙区 (投票予定者は1,709人) については宗教別人口比に関する資料が入手できなかった。1951年の国勢調査を参照すると、C町の全人口17,992人のうち、ムスリムは11,915人、ヒンドゥーは6,070人 (「指定カースト」1,124人、パキスタンからの移民307人を含む)、クリスチャンが7人となっている。ここから、ムスリムが多数派だという傾向は、かなり以前にまで遡ることができるようである。こうしたC町のムスリム人口比率の高さは、インドの他地域と比べて突出している。例えば、インド全体では約1割、比較的ムスリム人口の多いウッタール・プラデーシュ州西部全体でも約2割である (1991年国勢調査統計)。
- (7) ムスリムのなかでも、若年層になるほどウルドゥー語よりもヒンディー語の読み書きのほうが得意だという人が目立つ。これは、今日の北インド・ムスリム社会では、ウルドゥー語はムスリムの言語だと人々によって位置づけられているものの、学校教育が主としてヒンディー語でなされ、公式文書も多くの場合ヒンディー語で書かれることから、ウルドゥー語そのものの重要性が低下してきていることと関係がある。なお、1991年の国勢調査によると、識字人口は全人口55,829人のうち22,016人 (39%)、男女別に見ると男性は29,630人中13,601人 (46%)、女性は26,199人中8,415人 (32%) である。

北インド・ムスリム社会のザート=ピラーダリー・システム (小牧)

- (8) その人物の墓はC町の西端に現在でも残っている。
- (9) 自治委員会の委員長は、C町に自治委員会が設置された1866年の段階では、より大きな行政区 (*tahsir*)の徴税官(*tahsirdār*)が兼任することになっていた。委員長が住民のなかから、制限選挙ではあるが、選出されるようになったのは1909年以降のことである。それ以来、委員長は同一の人物または家系によって歴任されることも少なくなかった。しかし、分離独立後は普通選挙制度の導入と留保制度の適用などによって、C町の自治委員会を構成する人々の顔ぶれは多彩になってきた。
- (10) 北インド・ムスリム社会には、これら3つのザート以外にも、その祖先がイランおよびトルコ (中央アジア) の出身だといわれるムガル (*mughal*) と呼ばれるザートがある。
- (11) 実際には、回答者は、現職委員がこの一族からでているとはいわなかった。というのも、現職委員は異母弟の妻であり、彼女のザートはシェーフである。しかし、彼女は留保制度のために女性しか立候補できなくなった選挙区から、夫の代わりに出馬したといういきさつがあるため、住民のあいだでは、そのサイヤド一族が輩出した委員という位置づけがなされている。
- (12) 2番目の回答者の父方祖父が、自治委員会の委員および委員長の経験者であった。
- (13) 回答者によれば、英国植民地時代には織工ピラーダリーの成員は2,000人程度であったが、分離独立後、村などからの移住者が増え、とうとう5倍に増えたのだという。
- (14) 「パーブリー・マシド (パーブルのモスク)」とは、ムガル朝初代皇帝パーブルの時代 (1520年代後半) に建てられたムスリムの礼拝所である。ウツタル・プラデーシュ州、ファイザーバード県、アオーディヤー市に位置するこのマシドは、1992年12月6日に大勢の死傷者をだす大惨事の現場となり、インドのみならず世界中の人々を震撼させた。このいわゆる「アオーディヤー事件」を引き金として、ボンベイでは翌年1月に大規模なヒンドゥー・ムスリム暴動が起こった。なお、「アオーディヤー事件」の背景については、小谷(1993)を参照のこと。
- (15) このピラーダリーの成員のあいだでは鍛冶屋、大工、石工といった3つの異なる職業が互換性のある職業だと考えられており、ある成員が村から町に移住する際に職業を大工から鍛冶屋に変更することはよくみられるパターンであるだけでなく、ピラーダリー・アイデンティティに何ら影響を及ぼすものではない。また、異なる職業に従事する成員間でも通婚が可能である。第4章で述べるようにピラーダリーの新名称の由来は鍛冶屋に代表されているが、それは他の職業に従事する成員が鍛冶屋の下位区分を構成することを意味しない。
- (16) アキーカとはアラブ社会では「新生児誕生後七日目に捧げられる犠牲」であり「この日に赤子に名前をつけ、髪の毛を剃り、犠牲を捧げることが望ましいとされている」(黒田編 1983: 202)。北インドの場合、命名式は誕生後6日目の「チェッティー」と呼ばれる儀礼で行われる。アキーカは、それ以降に行われるのが一般的である。なお、このアキーカの際に男児には割礼も施される。
- (17) 屠殺された動物の皮革はカーンプル市の皮革工場に、骨はデリー市ノイダ地区やメーラト市にある製薬工場およびボタン工場に出荷されるという。
- (18) 回答者の2人目の妻が現職委員である。彼女は異なるピラーダリー (吟唱詩人・系図詠みピラーダリー) に属しているが、回答者の選挙区は留保制度のため女性しか立候補できず、彼女が夫の代わりに出馬したといういきさつがある。それゆえ、サイヤドの場合と同様に、この妻を回答者の傀儡とみることができる。
- (19) 回答者によれば、床屋ピラーダリーは70年前までは仲人 (仲介者・メッセンジャー) として信用され、大いに活躍していたのだが、現在はその限りでない。

- (20) この回答者の一族は分離独立時にラホールからインドに移住してきた。現在でもカラチ、ラホール、ベシャーワルなどには一族が住んでいるという。
- (21) ヒンドゥーが天寿を全うして死んだ場合に、死者の家から一定の地点（迎車が待機している所）まで楽器を演奏して練り歩く。そこから遺体は車で最寄りのガンジス河まで運ばれ、河岸で荼毘に付される。
- (22) 註(18)を参照。
- (23) 25選挙区からの委員立候補カテゴリーの内訳は次のとおりである。「指定カースト・女性」議席数1および「指定カースト・男性」議席数2、「後進階級・女性」議席数2および「後進階級・男性」議席数4、「一般・女性」議席数6および「一般・男性」議席数10。そして、委員長立候補カテゴリーは「後進階級」である。
- (24) アラブ社会ではアシュラーフとは「預言者の家族」の子孫、すなわちここでいうサイヤドのみを指す。
- (25) Dumont (1988[1970]), Ansari (1960), I. Ahmad (1978[1973]b), Mann (1992)もアシュラーフという言葉は用いていない。彼らの言及する範囲はウツタル・プラデーシュ州であり、本稿の調査地とも重なる。
- (26) C町のムスリム住民にとって、トイレ掃除は汚い仕事であり、ヒンドゥー不可触民の清掃カーストにしかできない仕事だと考えられている。そのため、全ての住民がヒンドゥー清掃カーストのサービスを必要とする。
- (27) あるヒンドゥー清掃カーストの成員は、ジャジマーンであるサイヤドの家庭での冠婚葬祭に際して、今日なお、カミーンとしての権利を保持し続けている。具体的には、断食月に2回食事をもらう権利、結婚式の折りにはかなり高額な贈与を乞う権利などである。さらに、清掃カーストの毎日の仕事に対する月々の報酬は、現在でも小麦粉という現物支給のかたちで支払われているところもある。両者の関係は、このように、経済的なものであると同時に儀礼的なものでもある。
- (28) Platts(1988[1884]: 960) 'lag (H)' の項を参照。
- (29) 文字どおりには「水ぎせると水を一緒に飲まないようにすること」であり、その意味は社会的交流を絶つことである。
- (30) 聖クルアーンは商業取引の対象ではないので、価格はないとされる。しかし、実際には聖クルアーンは売買される。その際に、聖クルアーンという言葉ではなく、聖クルアーンという給付に対する反対給付としての贈与という言葉が用いられる。
- (31) もちろん、厳格な内婚規制が存在・実践されている場合でも、地位の上下関係はみられる（例えばヒンドゥー社会）。従って、内婚と地位のあいだには直接的な因果関係はないかもしれない。しかし、C町のあるザート・ムスリム女性によれば、織工ビラーダリーと綿屋ビラーダリーは職業内容の類似性のゆえに互いに通婚関係があってもよさそうなものの、それが実践されないのは、彼らが互いに自分のビラーダリーのほうが上位であると考えているからにほかならないのだという。
- (32) I. Ahmadによれば、イスラーム化には2つの側面がある。ひとつは構造的な意味合いを喚起するものであり、上層階級のムスリムの諸慣習や諸慣行の採用をとおして諸集団や諸個人が社会的上昇を試みることで、もうひとつは文化的側面に関するものであり、ある集団がイスラーム的なイメージを徐々に出していくことによって非ムスリム諸集団から自集団を区別しようと試みることである(I. Ahmad 1978[1973]: 190 -191fn.). I. Ahmadの議論からは、彼が「アシュラーフ化」という言葉を採用しない態度がうかがえる。他方、Mannは、全てのアシュラーフが「伝

統的な町エリート(the qasbah elite)」の成員であるわけではないこと(すなわち、「手本」とされない貧しいアシュラーフ一族も存在すること)、そして、エリート自体が進歩派と保守派に分裂していることから、(「手本」とされうる)エリートには、アシュラーフという言葉よりも「上流階級(gentry)」という言葉のほうがふさわしいと主張する。「アシュラーフ化」という言葉を排したあとで、彼女は、その代替案として「上流階級化(gentrification)」という概念を提示している(Mann 1992: 39-40)。

- (33) ステイタス・モビリティと関連した上位模倣の対象は、シェーフである場合が圧倒的に多い。そのため、ピラダリー・ムスリムをはじめとした改宗ムスリムが「シェーフ化」に成功した場合には、シェーフ人口が増えるという結果をもたらす。第2章で紹介したように、C町のシェーフ人口が、その他のザート＝ピラダリーに比べて極端に多い理由のひとつは、数世代にわたって達成された「シェーフ化」の結果であるかもしれない。この現象(ヒンドゥー高カーストおよび低カーストからのイスラームへの改宗者の「シェーフ化」を含む)は、インド各地からの報告によっても明らかである(例えば Goodfriend 1983)。

引用文献

Ahmad, I. 1978 [1973]a Introduction, Ahmad, I. (ed.) *Caste and Social Stratification among Muslims in India*. New Delhi: Manohar.

Ahmad, I. 1978 [1973]b Endogamy and Status Mobility among the Siddiqui Sheikhs of Allahabad, Uttar Pradesh, Ahmad, I. (ed.) *Caste and Social Stratification among Muslims in India*. New Delhi: Manohar.

Ahmad, I. 1985 [1976] Caste and Kinship in a Muslim Village of Eastern Uttar Pradesh, Ahmad, I. (ed.) *Family, Kinship and Marriage among Muslims in India*. New Delhi: Manohar.

Ahmad, I. (ed.) 1978 [1973] *Caste and Social Stratification among Muslims in India*. New Delhi: Manohar.

Ahmad, S. 1970 *Social Stratification in a Panjabi Village, Contribution to Indian Sociology (n.s.)*.

Ansari, G. 1960 *Muslim Caste in Uttar Pradesh: A Study of Culture Contact*. Lucknow: Ethnographic and Folk Culture Society.

Barth, F. 1962 [1960] The System of Social Stratification in Swat, North Pakistan. Leach, E. R. (ed.) *Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-West Pakistan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Crooke, W. 1896 *The Tribes and Castes of the North Western Province & Oudh. Rpt.*

as 1974 *The Tribes and Castes of the North Western India*. Delhi: Cosmo Publications.

Dumont, L. 1988 [1970] *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications*. New Delhi: Oxford University Press.

Fuller, C. J. (ed.) 1996 *Caste Today*. New Delhi: Oxford University Press.

Gaborieau, M. 1972 Muslims in Hindu Kingdom of Nepal, *Contribution to Indian Sociology (n.s.)* 6.

Goodfriend, D. E. 1983 Changing Concepts of Caste and Status among Old Delhi Muslims, Ahmad, I. (ed.) *Modernization and Social Change among Muslims in India*. New Delhi: Manohar.

石井 溥 1993「季節・儀礼・社会：ガンジス河流域三地域の年中行事の比較」長野・井狩編『インド＝複合文化の構造』法蔵館。

小谷 汪之 1993『ラーム神話と牝牛～ヒンドゥー復古主義とイスラム』平凡社。

黒田 寿郎編 1983『イスラーム辞典』東京堂出版。

小牧 幸代 1997「北インド・ムスリム社会の婚姻儀礼と贈与交換：ウッタール・プラデーシュ州C町のサイフィー・ピラーダリーの事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』54。

Leach, E. R. 1962 [1960] Introduction: What should We Mean by Caste? Leach, E. R. (ed.) *Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-West Pakistan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lindholm, C. 1986 Caste in Islam and the Problem of Deviant System: A Critique of Recent Theory, *Contribution to Indian Sociology (n.s.)* 20-1.

Mann, E. 1992 *Boundaries and Identities: Muslims, Work and Status in Aligarh*. New Delhi: Sage Publications.

Platts, J. T. 1988 [1884] *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English*. New Delhi: Munshiram Manoharlal.

Quigley, D. 1994 Is a Theory of Caste still possible? *The editorial Board of the Sociological Review*. Oxford: Blackwell.

北インド・ムスリム社会のザート=ビラードリー・システム (小牧)

Srinivas, M. N. 1952 *Religion and Society among Coorgs of South India*. Oxford: Clarendon Press.

1972 [1966] *Social Change in Modern India*. Bombay: Orient Longman.

Vatuk, S. 1996 Identity and Difference or Equality and Inequality in South Asian Muslim Society, Fuller, C. J. (ed.) *Caste Today*. Delhi: Oxford University Press.

Vreede de Stuers, C. 1968 *Parda: A Study of Muslim Women's Life in Northern India*. Assen: Van Gorcum and Comp.